

住宅火災・放火火災の実態

(令和4年中)

東京消防庁
防災部防災安全課

目 次

第 1 章 住宅火災の実態	- 3 -
1 住宅火災の概要	- 3 -
(1) 住宅火災件数	- 3 -
(2) 住宅火災による死者数	- 4 -
(3) 高齢者と高齢者以外の人口 10 万人あたりの死者数とその推移	- 5 -
(4) 住宅火災の焼損床面積	- 6 -
2 住宅火災の発生状況	- 7 -
(1) 出火原因別	- 7 -
(2) 着火物別	- 8 -
(3) 出火箇所別	- 9 -
(4) 初期消火別	- 10 -
3 住宅火災による死傷者の状況	- 12 -
(1) 出火原因別	- 12 -
(3) 着火物別	- 19 -
(4) 出火箇所別	- 22 -
(5) 月別・時間帯別	- 24 -
(6) 年齢別・性別等	- 26 -
(7) 世帯構成別の死者発生状況	- 27 -
(8) 住宅火災発生時の行為別	- 28 -
4 住宅火用火災警報器等の概要	- 30 -
(1) 住宅火災警報器等の設置率及び住宅火災の件数の推移	- 30 -
(2) 住宅火災における住警器等の設置状況	- 30 -
(3) 住警器等設置有無別焼損等の比較	- 32 -
(4) 住警器全部設置・一部設置の焼損等比較	- 33 -
(5) 奏功事例の内訳	- 34 -
5 住宅火災から身の安全を守るためにできること	- 35 -
第 2 章 放火火災の実態	- 36 -
1 放火火災の概要	- 36 -
2 放火火災の発生状況	- 36 -
(1) 月別発生状況（5 年累計）	- 36 -
(2) 曜日別発生状況（5 年累計）	- 37 -
(3) 時間帯別発生状況	- 38 -
(4) 連続放火火災の発生状況	- 39 -
(5) 主な火元建物用途別の発生状況	- 40 -
(6) 主な放火場所と着火物	- 41 -
事例編	- 42 -

1 主な住宅火災の事例	- 42 -
(1) たばこ	- 42 -
(2) こんろ	- 42 -
(3) ストープ	- 43 -
(4) その他の出火原因	- 43 -
2 住宅用防災機器等の主な奏功事例	- 44 -
(1) 住宅用火災警報器	- 44 -
(2) 消火器	- 44 -
資料編	- 46 -
1 区市町村別住宅火災状況	- 46 -
2 区市町村別住宅火災による死者発生火災件数状況	- 47 -
3 区市町村別放火火災状況	- 48 -
4 広報資料（STOP！住宅防火シリーズ）	- 49 -
(1) STOP！着衣着火	- 49 -
(2) STOP！たばこ火災	- 51 -
(3) STOP！ストーブ火災	- 53 -
(4) STOP！こんろ火災	- 55 -
(5) STOP！電気火災	- 57 -

※ 記載している小数点以下の数値は四捨五入しており、個々の数値の和が合計と一致しない場合があります。

第1章 住宅火災の実態

(※火災による死者及び住宅火災による死者・負傷者は自損によるもの及び消防職員・消防団員を除く。)

1 住宅火災の概要

(1) 住宅火災件数

- 令和4年中の総火災件数は**3,953件**（うち治外法権1件含む）
- 住宅火災（住宅《複合用途建物の住宅部分を含む。》及び共同住宅《寄宿舍を含む。》から出火した火災をいう。）は**1,606件**で、前年に比べ、**11件減少**（図1-1）
- 建物から出火した火災は**2,778件**、このうち住宅火災の割合は**57.8%**
- 住宅火災の内訳は、住宅**588件**（36.6%）、共同住宅**1,018件**（63.4%）

（図1-1、表1-1、表1-2、図1-2）

※1 治外法権及び管外からの延焼火災1件は、総火災件数のみ計上します。
2 「建物から出火した火災」とは火元の用途が建物の火災です。

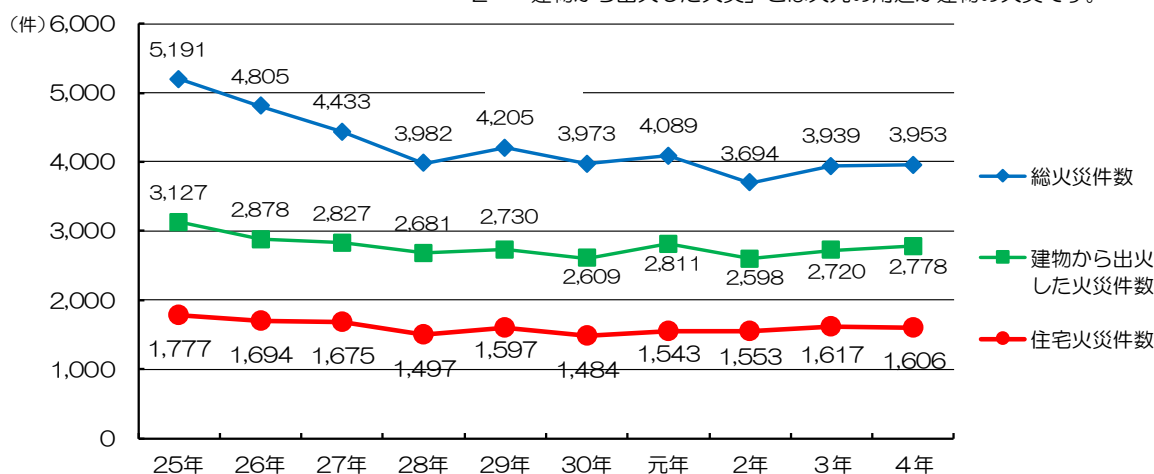


図1-1 過去10年間の住宅火災件数等の推移

表1-1 過去10年間の住宅火災件数等

年 別	25年	26年	27年	28年	29年	30年	元年	2年	3年	4年
総火災件数	5,191	4,805	4,433	3,982	4,205	3,973	4,089	3,694	3,939	3,953
建物から出火した火災件数	3,127	2,878	2,827	2,681	2,730	2,609	2,811	2,598	2,720	2,778
住宅火災件数	1,777	1,694	1,675	1,497	1,597	1,484	1,543	1,553	1,617	1,606
建物から出火した火災に対する住宅火災の割合	56.8%	58.9%	59.3%	55.8%	58.5%	56.9%	54.9%	59.8%	59.4%	57.8%

表1-2 建物から出火した火災の内訳

建物から出火した火災		2,778件
住宅火災件数	1,606件 (57.8%)	
住宅	588件 (36.6%)	
共同住宅	1,018件 (63.4%)	
住宅火災以外の建物から出火した火災	1,172件 (42.2%)	

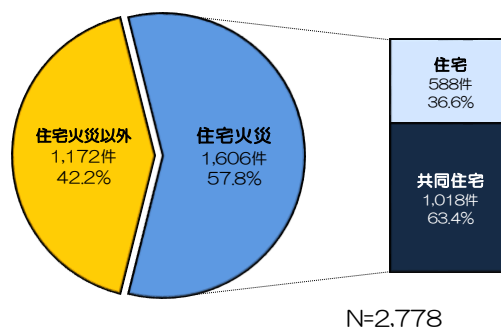


図1-2 建物から出火した火災の内訳

(2) 住宅火災による死者数

- 火災による死者は **75** 人、前年比**3**人増加。
- 住宅火災による死者は **71** 人、前年比**2**人増加。
- 火災による死者のうち住宅火災による死者の割合は **94.7%**を占めている。
- 住宅火災による死者 71 人のうち、65 歳以上の高齢者（以下「高齢者」という）は **52** 人、全体の **73.2%**を占め、高い割合となっている。

(図1-3、図1-4、表1-3)

- 住宅火災による死者を用途別に見ると、住宅で**47**人(**66.2%**)、共同住宅で**24**人(**33.8%**)の死者が発生し、住宅の割合が高くなっている。

(表1-4、図1-5)

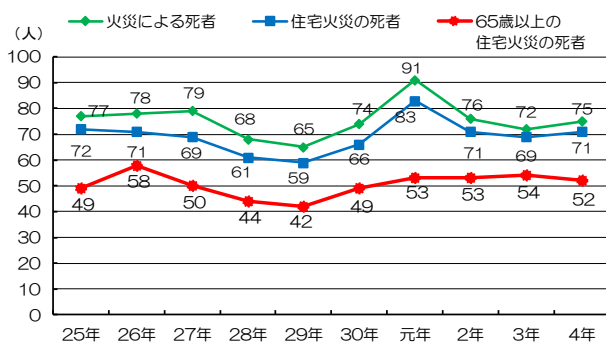


図 1-3 過去 10 年間の住宅火災等による死者数の推移

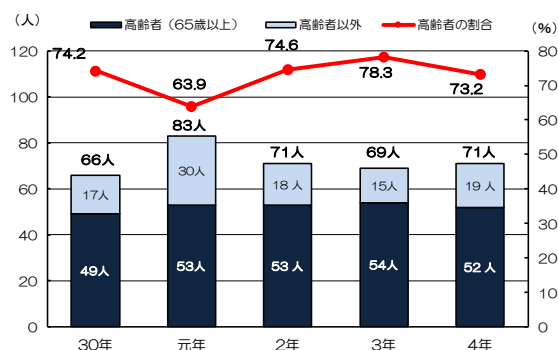


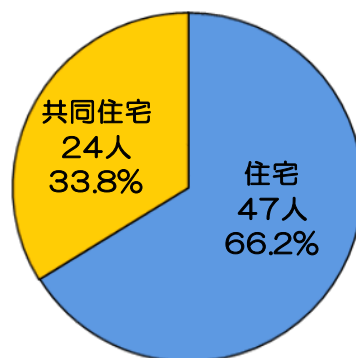
図 1-4 過去 5 年間の住宅火災による死者数と高齢者の割合

表 1-3 過去 10 年間の住宅火災による死者数

年 別	25年	26年	27年	28年	29年	30年	元年	2年	3年	4年
火災による死者	77	78	79	68	65	74	91	76	72	75
住宅火災による死者	72	71	69	61	59	66	83	71	69	71
住宅火災による死者の火災による死者に対する割合	93.5%	91.0%	87.3%	89.7%	90.8%	89.2%	91.2%	93.4%	95.8%	94.7%
高齢者の住宅火災による死者	49	58	50	44	42	49	53	53	54	52
高齢者の住宅火災による死者割合	68.1%	81.7%	72.5%	72.1%	71.2%	74.2%	63.9%	74.6%	78.3%	73.2%

表 1-4 住宅火災による死者の内訳

用途別	死者数 (高齢者数)	割合
住宅	47(35)	66.2%
共同住宅	24(17)	33.8%
合計	71(52)	100%



N=71

図 1-5 住宅用途別死者の内訳

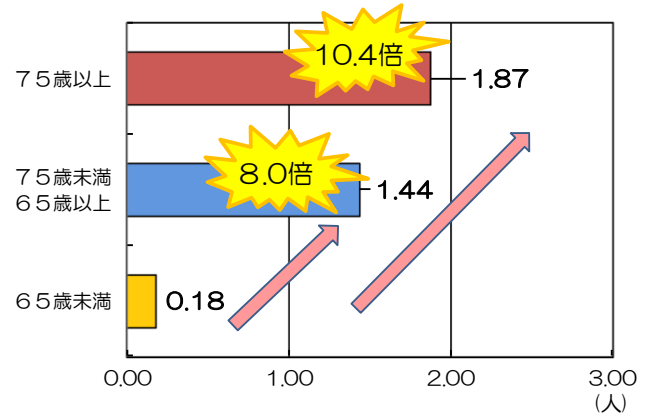
(3) 高齢者と高齢者以外の人口 10 万人あたりの死者数とその推移

- 65 歳未満の死者は **0.18** 人発生。
- 65 歳以上 75 歳未満の死者は **1.44** 人発生し、65 歳未満の死者の **8.0** 倍。
- 75 歳以上の死者は **1.87** 人発生し、65 歳未満の死者の **10.4** 倍。

(表 1-5、図 1-6)

表 1-5 高齢者死者数と人口

年齢別	死者	管内人口	人口 10 万人あたりの死者発生数
75 歳以上	31	1,654,367	1.87
75 歳未満 65 歳以上	21	1,461,302	1.44
65 歳未満	19	10,598,868	0.18

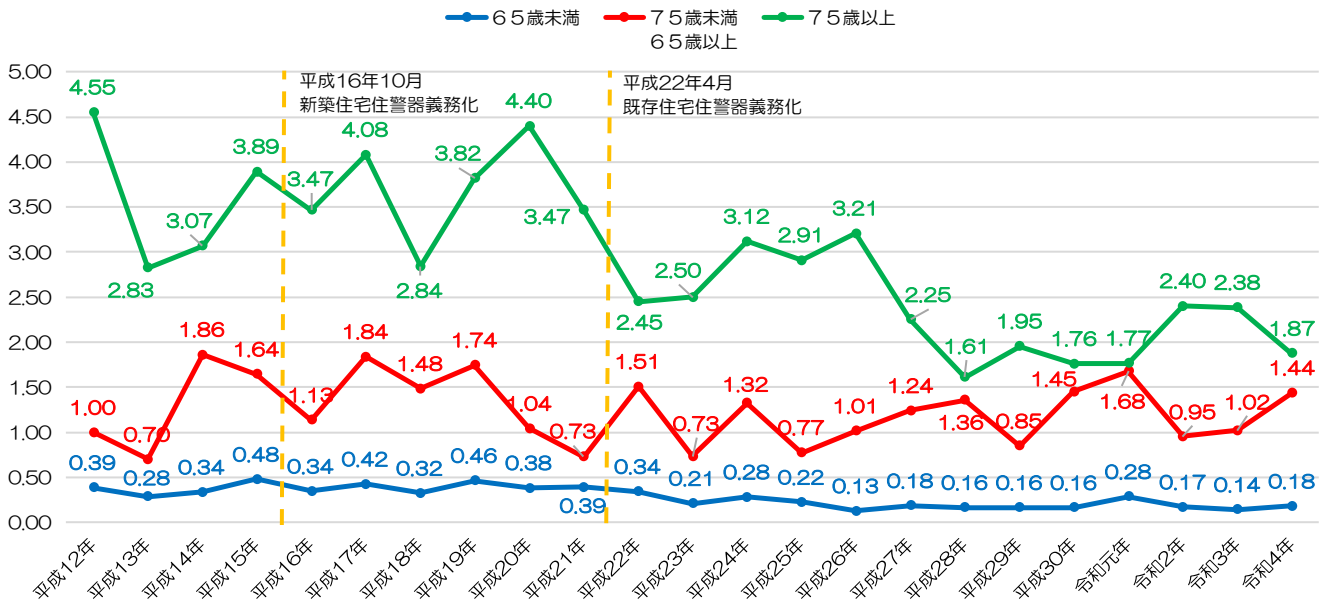


※管内人口：令和 4 年 1 月 1 日現在

(「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」東京都より)

図 1-6 年齢別人口 10 万人あたりの住宅火災による死者数

【参考資料】 人口 10 万人あたりの死者数の推移（平成 12 年～令和 4 年）



(4) 住宅火災の焼損床面積

- 令和 4 年中の住宅火災の焼損床面積は **12,052 m²**、前年比 **982 m²**増加
- 住宅火災 1 件あたりの平均焼損床面積は **7.50 m²**、前年比 **0.65 m²**増加

(図 1-7)

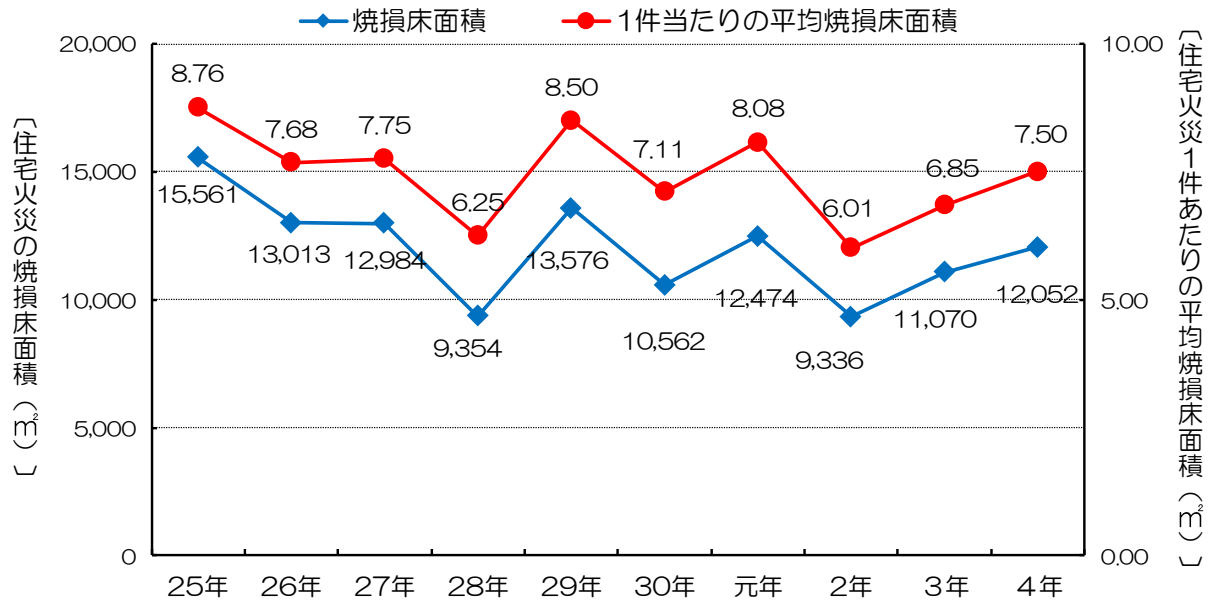


図 1-7 過去 10 年間の住宅火災の焼損床面積の推移

(2) 着火物別

- 「くず類」が**223件(13.9%)**で最も多い
- 次いで「紙類」が**146件(9.1%)**、「布団類」が**135件(8.4%)**と続く

(表 1-7、図 1-9)

表 1-7 住宅火災の着火物別の割合

着火物	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
くず類	223	65	158
紙類	140	44	96
布団類	135	57	78
衣類・繊維類	99	33	66
てんぷら油	92	17	75
ガス類	88	29	59
内装・建具・家具類	71	34	37
着衣	46	24	22
ガソリン等	13	10	3
カーテン・じゅうたん等	10	7	3
電線被覆	7	1	6
その他	557	214	343
不明	125	53	72
合計	1,606	588	1,018

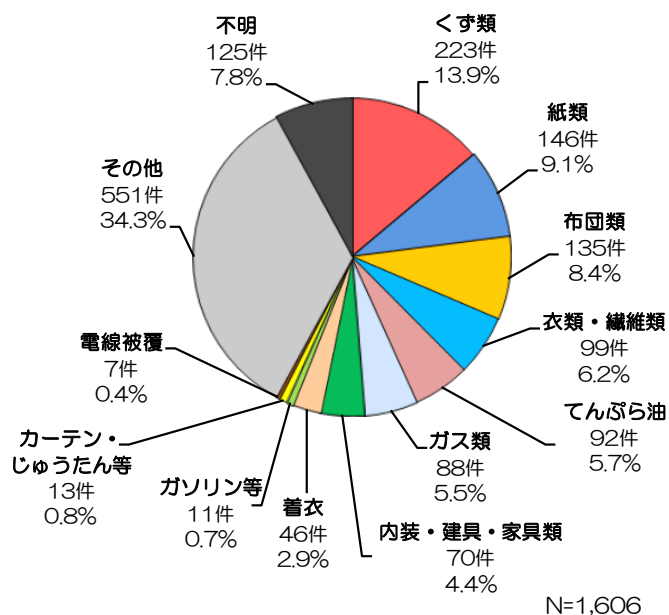


図 1-9 着火物別住宅火災件数

【参考資料】 着火物別火災件数の推移 過去5年

着火物	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
くず類	205	211	186	210	223
紙類	123	116	134	128	140
布団類	174	150	143	134	135
衣類・繊維類	110	123	130	111	99
てんぷら油	80	90	128	107	92
ガス類	55	38	77	85	88
内装・建具・家具類	73	71	52	70	71
着衣	41	60	57	47	46
ガソリン等	16	25	9	10	13
カーテン・じゅうたん等	16	14	14	24	10
電線被覆	27	20	24	23	7
その他	430	459	461	549	557
不明	134	166	138	119	125
合計	1,484	1,543	1,553	1,617	1,606

(3) 出火箇所別

- 「居室等」が**650件(40.5%)**と最も多い。
- 次いで「台所・キッチン等」が**622件(38.7%)**。
- 「居室等」と「台所・キッチン等」合わせると全体の**約8割(79.2%)**を占めている。

(表 1-8、図 1-10)

表 1-8 出火箇所別住宅火災件数

出火箇所	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
居室等	650	284	366
台所・キッチン等	622	184	438
便所・洗面所・浴室等	66	28	38
廊下・階段等	47	11	36
玄関・ホール	38	13	25
車庫・駐車場等	10	7	3
建物の外周部	5	4	1
その他	168	57	111
合計	1,606	588	1,018

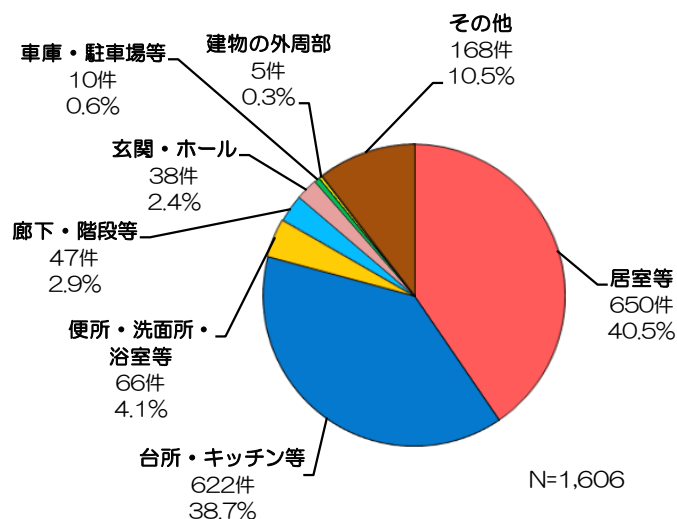


図 1-10 住宅火災の出火箇所別の割合

【参考資料】 出火箇所別火災件数の推移 過去5年

	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
居室等	649	711	630	682	650
台所・キッチン等	511	536	635	638	622
便所・洗面所・浴室等	54	61	52	67	66
廊下・階段等	30	36	62	48	47
玄関・ホール	35	32	23	27	38
車庫・駐車場等	16	10	14	10	10
建物の外周部	8	7	7	6	5
バルコ	112	85	90	82	0
その他	68	61	39	55	168
不明	1	4	1	2	0
合計	1,484	1,543	1,553	1,617	1,606

(4) 初期消火別

ア 初期消火実施状況

- 「初期消火実施」が**1,021件(63.6%)**、「初期消火なし」が**397件(24.7%)**、「自然鎮火していた」が**188件(11.7%)**
- 初期消火実施のうち、「成功」が**827件(81.0%)**、「失敗」が**194件(19.0%)**となり、「成功」が「失敗」の**約4倍**

(図 1-11)

初期消火「失敗」の理由には、「発見が遅れた」、「あせり消火できなかった」、「煙が充満していた」、「避難に重点をおいた」等がありました。

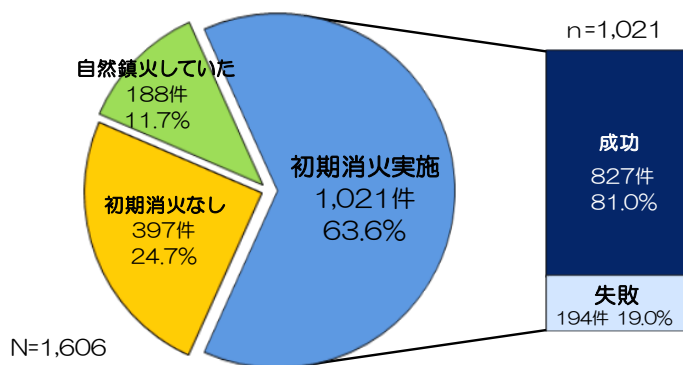


図 1-11 初期消火実施状況

イ 初期消火実施状況の割合の推移

- 平成 19 年より住宅火災における初期消火成功状況は、**5割前後**で推移している

(図 1-12)

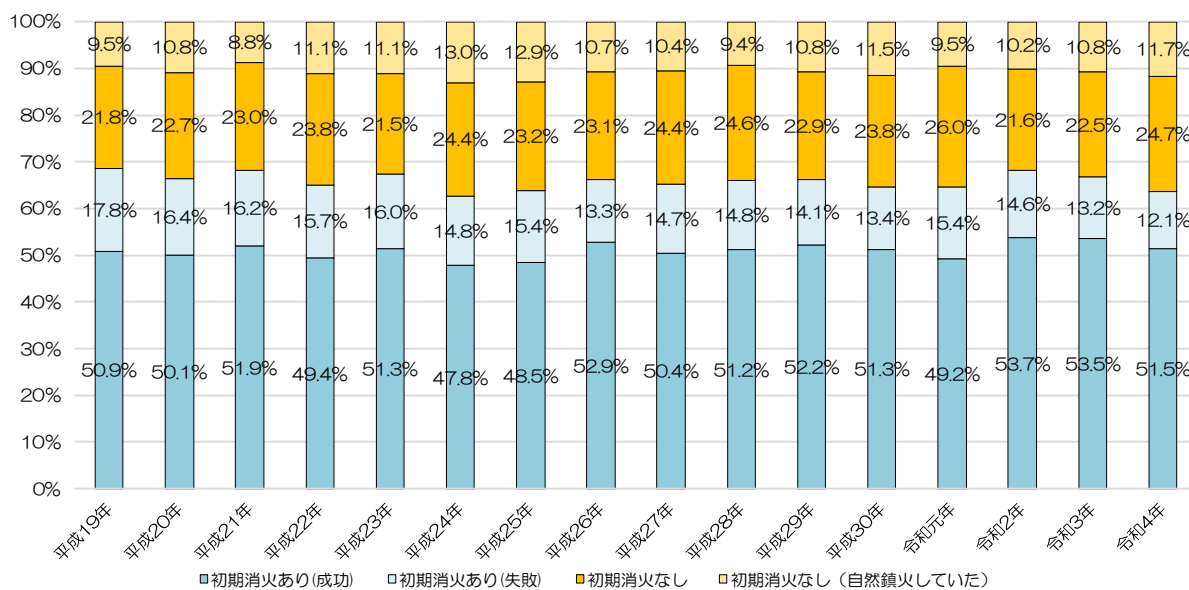


図 1-12 初期消火実施状況割合の推移

ウ 初期消火実施状況別状況

- 初期消火が「成功」した火災と、初期消火が「失敗・なし」（「なし」については自然鎮火を除く。）の火災について、火災 100 件当たりの死者数、火災 1 件当たりの損害額及び焼損床面積で比較すると、全ての項目で初期消火が「成功」した方が被害は少なくなっている

(図 1-13-1~3)

図 1-13 令和4年中の初期消火実施別状況（自然鎮火を除く）

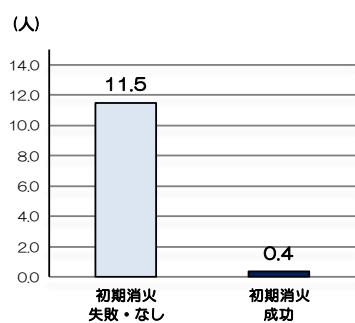


図 1-13-1 火災 100 件あたりの死者数

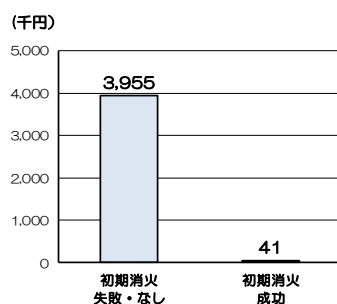


図 1-13-2 火災 1 件あたりの損害

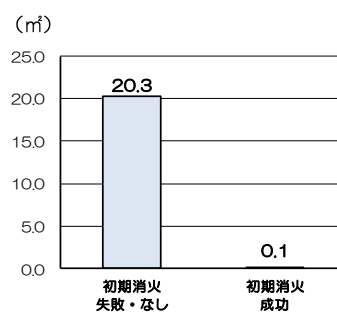


図 1-13-3 火災 1 件あたりの焼損床面積

【参考資料】令和4年中 初期消火実施有無別状況

	件数 (件)	死者 (人)	焼損床面積 (㎡)	焼損額合計 (円)
初期消火実施 (成功)	827	3	67	33,984,886
初期消火実施 (失敗)	194	17	5,867	1,171,375,193
初期消火 なし	397	51	6,087	1,130,373,101
自然鎮火していた	188	0	31	3,548,8754
合計	1,606	71	12,052	2,371,221,934

3 住宅火災による死傷者の状況

(1) 出火原因別

ア 死者が発生した住宅火災の出火原因

- ▶ 住宅火災による死者 71 人中、「たばこ」15 人(21.1%)、「ストーブ」8 人(11.3%)、「コード」5 人(7.0%)の順で多く発生

(表 1-9、図 1-14)

表 1-9 出火原因別死者数

出火原因	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	住宅 火災件数	死者が生じた 火災発生率
たばこ	15(10)	14	229	6.1%
ストーブ	8(7)	8	105	7.6%
コード	5(4)	5	34	14.7%
ロウソク	4(3)	3	33	9.1%
こんろ	3(3)	3	347	0.9%
放火	10(5)	6	122	4.9%
火遊び	-(-)	-	6	0.0%
その他	7(6)	6	591	1.0%
不明	19(14)	16	139	11.5%
合計	71(52)	61	1,606	3.8%

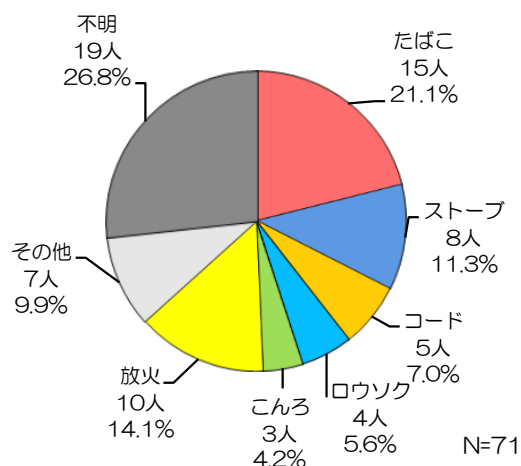


図 1-14 出火原因別死者

- ※1 「こんろ」は、ガステーブル等及び電気こんろを合わせたものです。
- ※2 「放火」は、放火の疑いを含みます。
- ※3 「ストーブ」は、電気、ガス及び石油を合わせたものです。

【参考資料】 出火原因別死者発生数の推移 過去5年

出火原因	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
たばこ	26	35	13	15	15
ストーブ	9	9	9	9	8
コード	1	-	3	4	5
ロウソク	4	2	-	1	4
こんろ	3	3	4	6	3
放火	2	8	8	3	10
火遊び	-	-	-	-	-
その他	3	3	3	9	7
不明	18	23	31	22	19
合計	66	83	71	69	71

- ※ 平成 30 年から令和 4 年までの住宅火災による死者は 360 人発生し、出火原因の約半数が「たばこ」、「ストーブ」、「こんろ」、「コード」によるものです。

イ 死者が発生した住宅火災の出火原因別の特徴

死者が発生した住宅火災における発生経過を主な4つの出火原因別にみると、それぞれ特徴がありました。

(ア) たばこ

- 死者 **15人**が発生し、最も多い
- 経過内訳を見ると「火源の落下※」が **9人**、「不始末※」が **5人**、「不明」が**1人**発生
 - ※「火源の落下」 たばこの火源が布団や衣類等の可燃物に着火
 - 「不始末」 火種の残った吸い殻をごみ箱や灰皿等に捨てることで可燃物に着火
- 女性が**2人**であることに対し、男性が **13人**と**男性が多い割合を占めている**

(表 1-10、図 1-15)

表 1-10 たばこによる火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
火源の落下	9 (6)	7	2
不始末	5 (3)	5	0
不明	1 (1)	1	0
合計	15 (10)	13	2

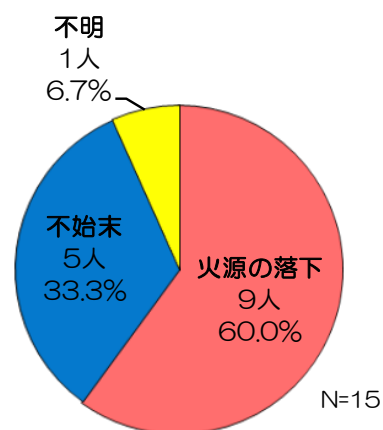


図 1-15 たばこによる住宅火災死者の経過

(イ) ストープ

- 死者**8人**が発生
- 経過内訳を見ると、「可燃物の接触※」が **7人**、「電線が短絡する」が **1人**発生
 - ※「可燃物の接触」 ストープ周囲にある衣類や布団等の可燃物が接触して着火
- 「可燃物の接触」の死者7人のうち、**6人が電気ストーブを使用していた**

(表 1-11、図 1-16)

表 1-11 ストープによる火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
可燃物の接触	7 (6)	4	3
電線が短絡する	1 (1)	1	0
合計	8 (7)	5	3

※ 死者8人のうち7人が電気ストーブによるもの。

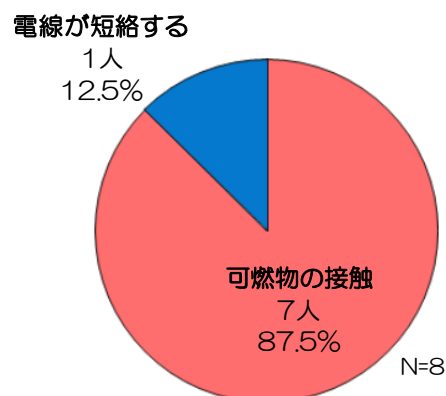


図 1-16 ストープによる住宅火災死者の経過

(ウ) **こんろ**

- 死者**3人**が発生
- 経過内訳を見ると、「可燃物の接触」が**2人**、「引火する」が**1人**発生
- 「可燃物の接触」の死者2人の着火物は、**こんろ**周りに置かれた「**くず類**」、「**着衣**」によるもの

(表 1-12、図 1-17)

表 1-12 **こんろ**による火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
可燃物の接触	2 (2)	1	1
引火する	1 (1)	0	1
合計	3 (3)	1	2

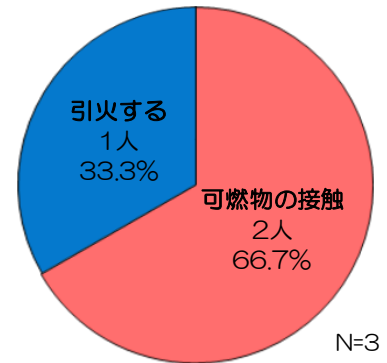


図 1-17 **こんろ**による住宅火災死者の経過

(ウ) **コード**

- 死者**5人**が発生
- 経過内訳を見ると、**5人全員**が「電線が短絡する」で発生
- 「電線が短絡する」の着火物は「**くず類**」、「**衣類・繊維類**」、「**紙類**」等によるもの

(表 1-13、図 1-18)

表 1-13 **コード**による火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
電線が短絡する	5 (4)	2	3
合計	5 (4)	2	3

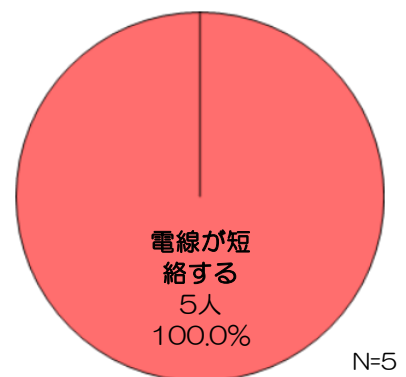


図 1-18 **コード**による住宅火災死者の経過

参考 電気コード火災等

住宅火災のうち、電気が関係する漏電や電線の短絡、スパーク、半断線、トラッキング等による発熱によって起こる火災を「電気コード火災等」とする

- 令和4年中は**354件**発生し、昨年よりも17件減少
- 電気コード火災等による死者は**12人**発生しており、昨年から5人増加

(図 1-19)

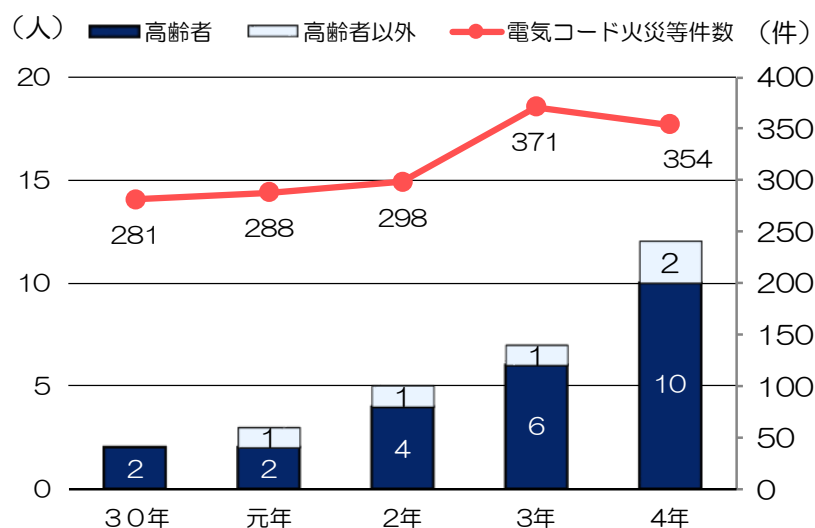


図 1-19 過去5年間の住宅火災における電気コード火災等の死者数及び火災件数の推移

- 死者が発生した「電気コード火災等」の主な出火原因について過去5年分を整理すると、テーブルタップ等の「コード」、「電気冷蔵庫」、「差し込みプラグ」、「屋内線」の順で死者が多く発生

(図 1-20)

- 経過別について過去5年分を整理すると、「電線が短絡する」、「金属の接触部が過熱する」、「トラッキング※」の順で多く発生

(図 1-21)

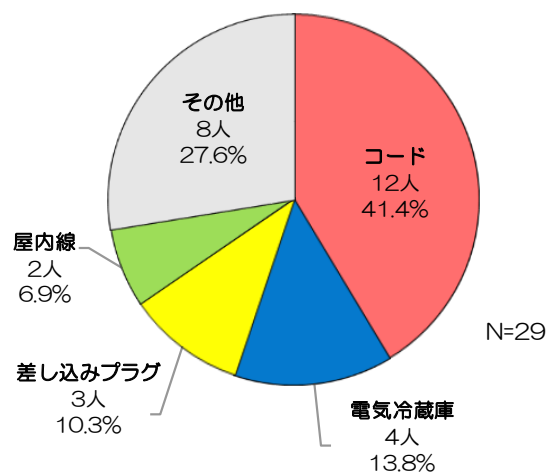


図 1-20 主な電気コード火災等による死者数（平成30年～令和4年）

※トラッキングとは：湿気を含むホコリ等が差し込みプラグの差し込みに付着した状態で電圧が加わり、火花が発生して火災に至ります。

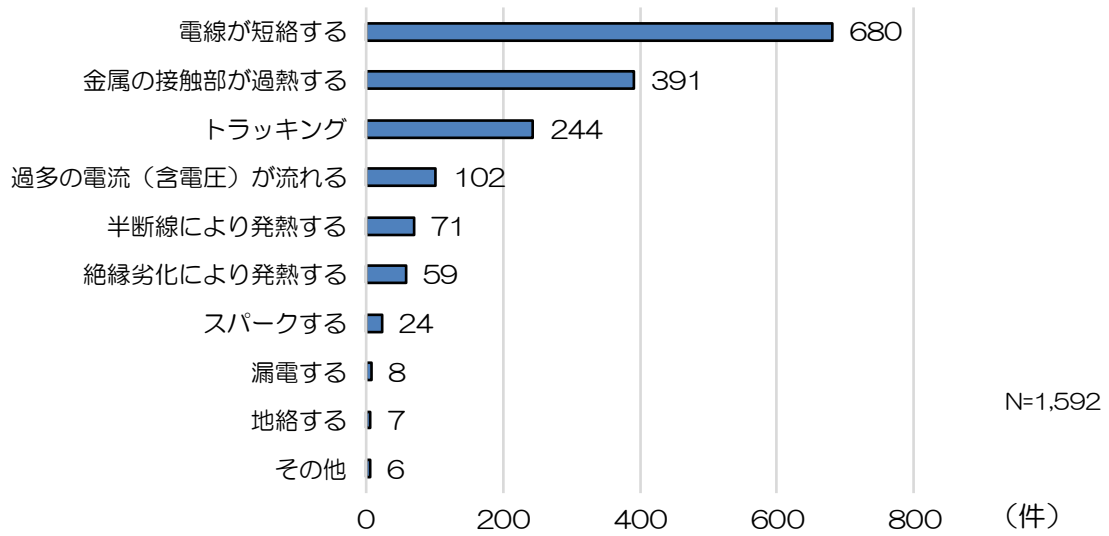


図 1-21 電気コード火災等における主な出火経過（平成 30 年から令和 4 年まで）

ウ 負傷者が発生した住宅火災の出火原因

- 住宅火災による負傷者は **506 人**
- 出火原因別にみると、「こんろ」が **112 人(22.1%)**で最も多く、次いで「たばこ」が **64 人(12.6%)**、「ストーブ」が **43 人(8.5%)**発生

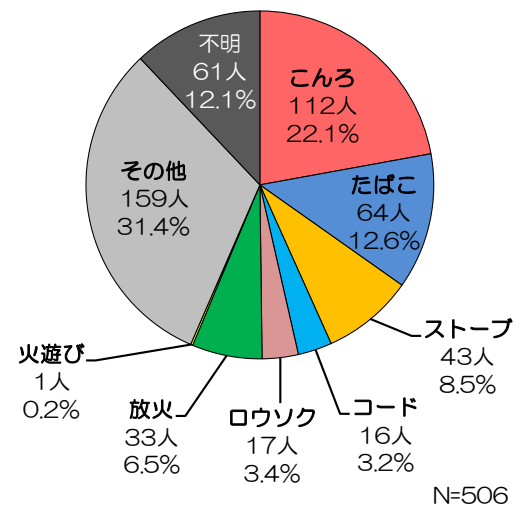
(図 1-22)

- 負傷者の発生率をみると、住宅火災 **1606 件中 392 件(24.4%)**で負傷者が発生
- 「コード」、「ロウソク」が原因で発生した火災では約 **4 割の火災で負傷者が発生**

(表 1-14)

表 1-14 出火原因別負傷者数

出火原因	負傷者数 (高齢者数)	負傷者発生 火災件数	住宅 火災件数	負傷者が生じた 火災発生率
こんろ	112(46)	105	347	30.3%
たばこ	64(27)	49	229	21.4%
ストーブ	43(22)	33	105	31.4%
コード	16(4)	13	34	38.2%
ロウソク	17(5)	12	33	36.4%
放 火	33(9)	24	122	19.7%
火 遊 び	1(0)	1	6	16.7%
そ の 他	159(41)	116	591	19.6%
不 明	61(24)	39	139	28.1%
合 計	506(178)	392	1,606	24.4%



- ※1 「こんろ」は、ガステーブル等及び電気こんろを合わせたものです。
 ※2 「放火」は、放火の疑いを含みます。
 ※3 「ストーブ」は、電気、ガス及び石油を合わせたものです。

図 1-22 出火原因別負傷者の割合

【参考資料】 出火原因別負傷者発生数の推移 過去5年

出火原因	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
こんろ	110	125	162	113	112
たばこ	87	66	59	81	64
ストーブ	54	54	45	41	43
コード	4	13	16	13	16
ロウソク	14	17	18	24	17
放火	26	36	33	8	33
火遊び	2	-	-	2	1
その他	106	90	130	142	159
不明	99	61	47	48	61
合計	502	462	510	472	506

エ 「こんろ」が原因となる負傷者が発生した住宅火災の特徴

- 経過をみると、「着衣に着火した火災」が 33 人(29.5%)と最も多い
- 次いで「天ぷら油火災※」が 30 人(26.8%)、「エアゾール缶等※に関連した火災」が 19 人(17.0%)発生

(図 1-23)

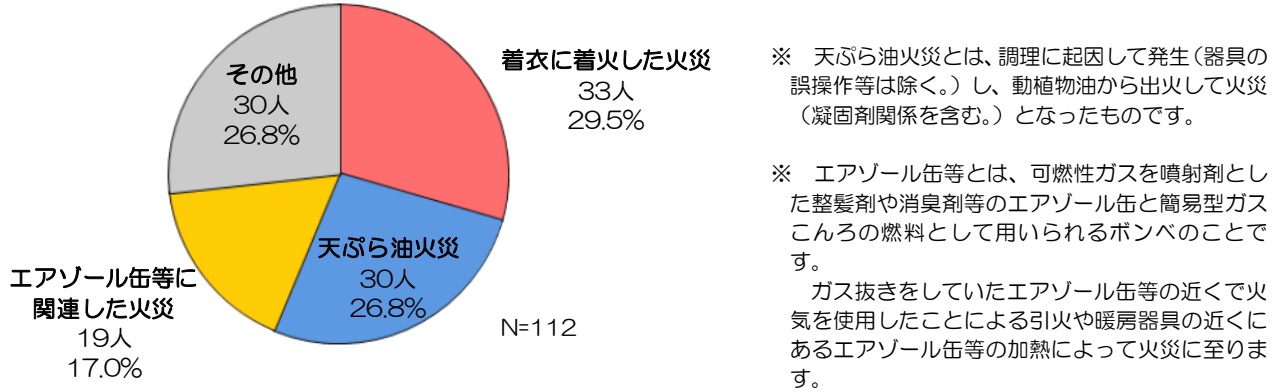


図 1-23 「こんろ」を出火原因とする住宅火災の負傷経過

(3) 着火物別

ア 死者が発生した住宅火災の着火物

- 「布団類」が12人(16.9%)と最も多い
- 次いで「紙類」が11人(15.5%)、「衣類・繊維類」が8人(11.3%)と続く

(表 1-15、図 1-24)

表 1-15 着火物別死者数

着火物	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	住宅 火災件数	死者が生じた 火災発生率
布団類	12(9)	10	135	7.4%
紙類	11(6)	8	146	5.5%
衣類・繊維類	8(5)	7	99	7.1%
くず類	7(5)	7	223	3.1%
内装・建具・ 家具類	3(3)	2	70	2.9%
着衣	2(2)	2	46	4.3%
ガス類	1(1)	1	88	1.1%
ガソリン等	1(1)	1	13	7.7%
てんぷら油	—	—	92	—
カーテン・ じゅうたん等	—	—	11	—
電線被覆	—	—	7	—
その他	4(4)	4	551	0.7%
不明	22(18)	19	125	15.2%
合計	71(52)	61	1,606	3.8%

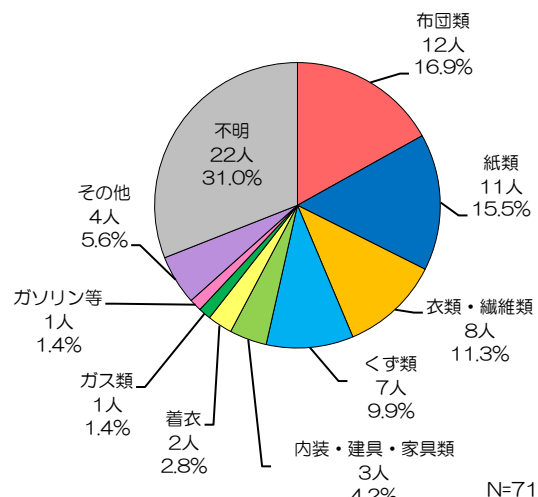


図 1-24 着火物別死者の割合

【参考資料】 出火原因別死者発生数の推移 過去5年

着火物	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
布団類	10	17	12	7	12
紙類	1	1	2	1	11
衣類・繊維類	6	9	9	7	8
くず類	9	7	4	9	7
内装・建具・家具類	10	6	2	2	3
着衣	4	2	4	1	2
ガス類	-	-	-	1	1
ガソリン等	-	4	-	1	1
カーテン・じゅうたん等	1	1	1	1	-
電線被覆	-	-	1	1	-
その他	1	1	1	5	4
不明	24	35	34	33	22
合計	66	83	70	69	71

イ 負傷者が発生した住宅火災の着火物

- 着火物別の負傷者の発生状況を見ると、「布団類」が**53人(10.5%)**と最も多い
- 次いで「くず類」が**51人(10.1%)**、「ガス類」が**47人(9.3%)**と続く
- 「着衣」、「ガソリン等」に着火した火災は**8割以上で負傷者が発生**

(表 1-16、図 1-25)

表 1-16 着火物別負傷者数

着火物	負傷者数 (高齢者数)	負傷者発生 火災件数	住宅 火災件数	負傷者が生じた 火災発生率
布団類	53(21)	42	135	31.1%
くず類	51(17)	39	223	17.5%
ガス類	47(14)	43	88	48.9%
着衣	43(28)	41	46	89.1%
衣類・繊維類	38(17)	28	99	28.3%
紙類	37(13)	29	146	19.9%
てんぷら油	30(3)	29	92	31.5%
内装・建具・ 家具類	19(6)	10	70	14.3%
ガソリン等	15(4)	11	13	84.6%
カーテン・ じゅうたん等	5(3)	5	11	45.5%
電線被覆	1(0)	1	7	14.3%
その他	106(28)	76	551	13.8%
不明	61(24)	38	125	30.4%
合計	506(178)	392	1,606	24.4%

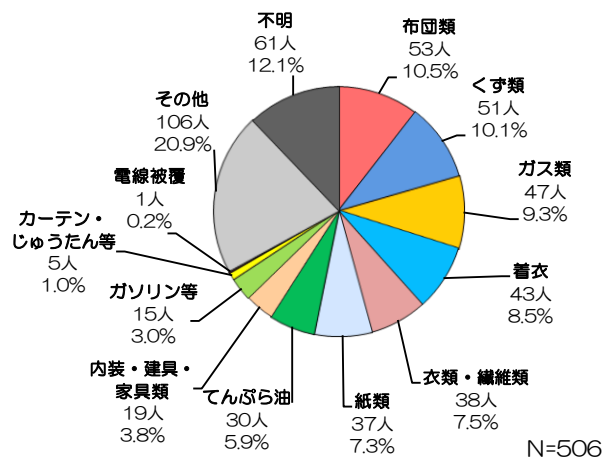


図 1-25 着火物別負傷者の割合

【参考資料】 出火原因別負傷者発生数の推移 過去5年

着火物	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
布団類	60	61	74	60	53
くず類	46	33	43	33	51
ガス類	31	26	51	49	47
着衣	40	52	47	42	43
衣類・繊維類	39	54	60	39	38
紙類	36	31	17	44	37
てんぷら油	27	33	50	32	30
内装・建具・家具類	21	11	16	16	19
ガソリン等	12	13	10	3	15
カーテン・じゅうたん等	6	4	6	6	5
電線被覆	3	1	1	3	1
その他	75	66	68	87	106
不明	106	77	67	58	61
合計	502	462	510	472	506

ウ 「布団類」に着火した死傷者が発生した住宅火災の特徴

- 最も多くの死傷者が発生した住宅火災の着火物は「布団類」で、**135件**発生
- 「布団類」着火した住宅火災のうち、「たばこ」を出火原因とした火災が**45件(33.3%)**と最も多い
- 「たばこ」を出火原因として「布団類」に着火した住宅火災 45件において、**18人**の死傷者が発生し、このうち死者が**6人**、重症の負傷者が**1人**、中等症の負傷者が**4人**、軽傷の負傷者が**7人**発生

(図 1-26)

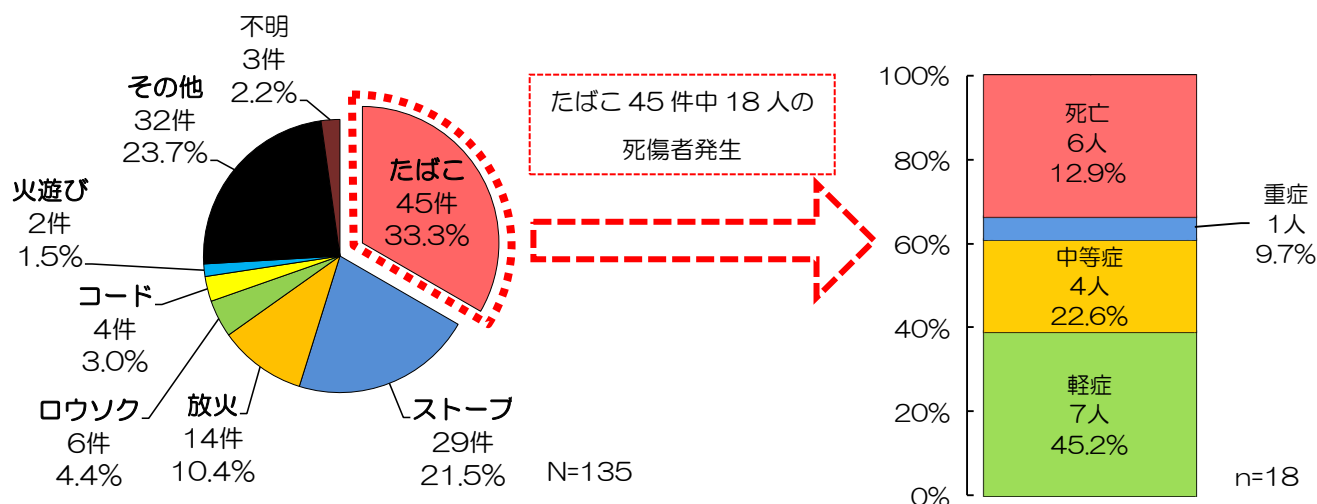


図 1-26 布団類への着火による住宅火災の出火原因別火災件数とたばこによる死傷者数の内訳

- 死傷者 18 人の内訳は、高齢者**8人**に対して高齢者以外は **10人**となり、約**4割**が高齢者となっている。
- 死亡については高齢者の割合が約**7割**と高くなっている

(図 1-27)

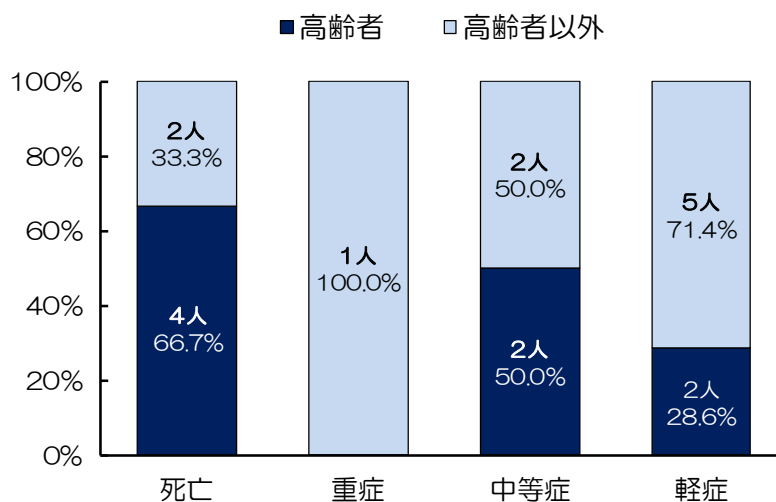


図 1-27 たばこを出火原因として布団類に着火した住宅火災における死傷者の年齢構成

(4) 出火箇所別

ア 死者が発生した住宅火災の出火箇所

- 出火箇所別の死者発生状況をみると、「居室等」が46人(64.8%)と最も多い
- 次いで「台所・キッチン等」が11人(15.5%)発生
- 「居室等」と「台所・キッチン等」を合わせると約8割以上を占めている

(表 1-17、図 1-28)

表 1-17 出火箇所別死者数

出火箇所	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	住宅 火災件数	死者が生じた 火災発生率
居室等	46(33)	43	650	6.6%
台所・キッチン等	11(9)	10	622	1.6%
便所・洗面所・浴室等	-(-)	-	66	0.0%
玄関・ホール	8(5)	3	38	7.9%
廊下・階段等	3(2)	2	47	4.3%
車庫・駐車場等	-(-)	-	10	0.0%
建物の外周部	-(-)	-	5	0.0%
その他	3(3)	3	168	1.8%
合計	71(52)	61	1,606	3.8%

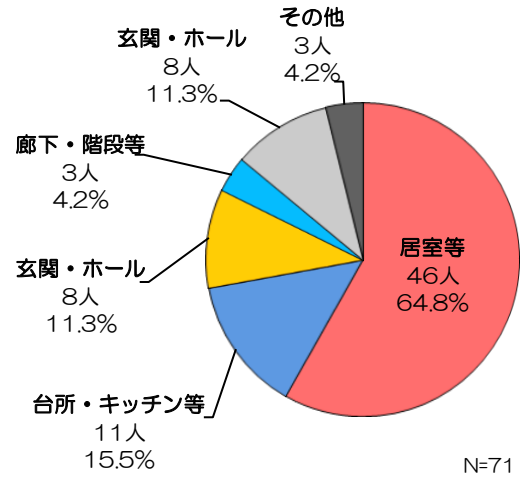


図 1-28 出火箇所別死者の割合

【参考資料】 出火原因別死者発生数の推移 過去5年

出火箇所	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
居室等	51	67	49	53	46
台所・キッチン等	11	9	14	13	11
便所・洗面所・浴室等	-	1	4	-	-
玄関・ホール	1	4	-	-	8
廊下・階段等	-	-	1	-	3
玄関・ホール	1	4	-	-	8
建物の外周部	-	-	-	-	-
ベランダ	-	1	-	-	-
その他	3	1	1	-	3
不明	-	-	2	-	-
合計	66	83	71	69	71

イ 負傷者が発生した住宅火災の出火箇所

- 出火箇所別の負傷者の発生状況を見ると、「居室等」が**267人(52.8%)**と最も多い
- 次いで「台所・キッチン等」が**164人(32.4%)**発生
- 「居室等」と「台所・キッチン等」を合わせると**約8割**を占めている

(表 1-18、図 1-29)

表 1-18 出火箇所別負傷者数

出火箇所	負傷者数 (高齢者数)	負傷者発生 火災件数	住宅 火災件数	負傷者が生じた 火災発生率
居室等	267(93)	194	650	29.8%
台所・キッチン等	164(62)	148	622	23.8%
便所・洗面所・浴室等	11(3)	11	66	16.7%
玄関・ホール	10(2)	8	38	10.5%
廊下・階段等	6(5)	4	47	17.0%
車庫・駐車場等	3(1)	2	10	20.0%
建物の外周部	-(-)		5	0.0%
その他	45(12)	25	168	14.9%
合計	506(178)	392	1,606	24.4%

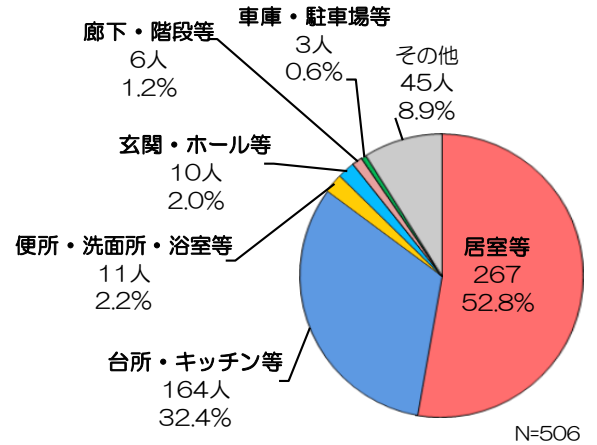


図 1-29 出火箇所別負傷者の割合

【参考資料】 出火原因別負傷者発生数の推移 過去5年

出火箇所	平成 30 年	令和元年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年
居室等	286	265	263	262	267
台所・キッチン等	153	165	218	163	164
便所・洗面所・浴室等	12	8	10	12	11
玄関・ホール	6	5	-	3	10
廊下・階段等	5	3	6	5	6
車庫・駐車場等	3	3	3	-	3
建物の外周部	-	-	-	-	-
ベランダ	16	4	8	17	45
その他	18	9	2	9	-
不明	3	-	-	1	-
合計	502	462	510	472	506

(5) 月別・時間帯別

ア 月別の住宅火災による死傷者発生状況

- 月別死者発生数は、2月が**17人**で最も多く、次いで3月が**16人**の順で発生
- 月別負傷者発生数は、2月が**59人**で最も多く、次いで3月が**57人**の順で発生
- 負傷者は1月から3月、12月の火災多発期に**50人台**発生と多い傾向にある
- 月別の住宅火災件数、死者数及び負傷者数は、いずれも**火災多発期(12月1日から3月31日まで間)の期間中あるいはその前後の期間で多く発生している**

(表 1-19、図 1-30)

表 1-19 月別死傷者発生状況

出火月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
死者数	6	17	16	4	5	1	3	2	2	4	3	8	71
死者発生率※1	3.9%	7.7%	9.1%	2.8%	1.7%	0.9%	2.2%	0.9%	2.1%	3.1%	2.2%	4.4%	3.8%
高齢者死者数	6	14		3	2	1	1	1		4	3	2	37
負傷者数	53	59	57	37	49	39	28	34	23	35	37	55	506
負傷者発生率※2	26.6%	25.7%	27.3%	22.7%	30.3%	25.5%	25.8%	25.0%	14.6%	22.5%	22.8%	22.4%	24.4%
高齢者負傷者数	27	29	22	11	12	9	13	9	7	8	8	23	178
住宅火災件数	154	183	154	141	119	110	93	108	96	129	136	183	1606
死者発生住宅火災件数	6	14	14	4	2	1	2	1	2	4	3	8	61
負傷者発生住宅火災件数	41	47	42	32	36	28	24	27	14	29	31	41	392

※1 死者発生率＝死者発生住宅火災件数／住宅火災件数

※2 負傷者発生率＝負傷者発生住宅火災件数／住宅火災件数

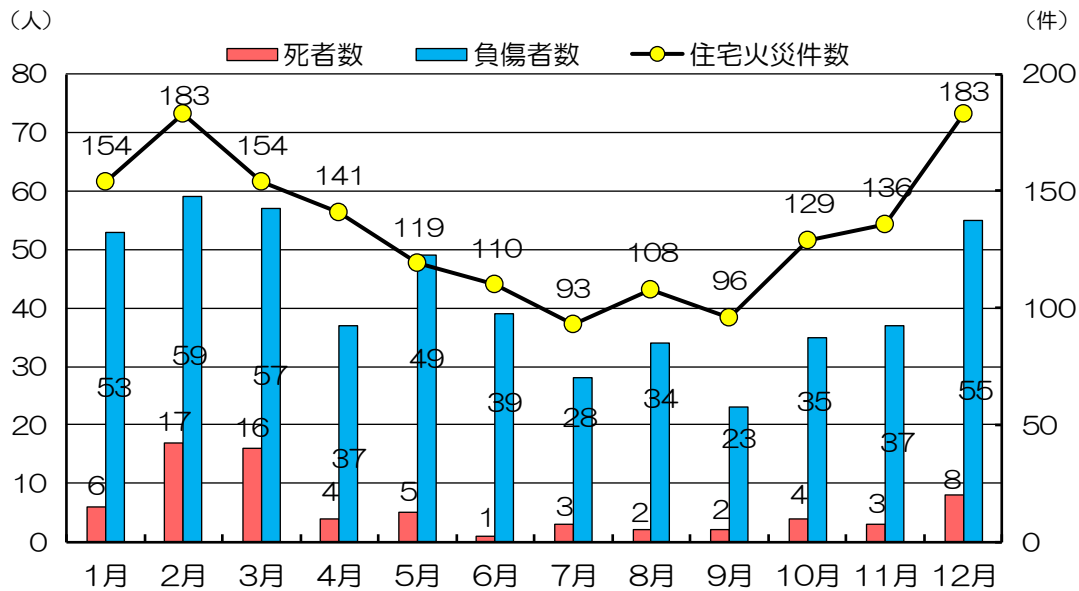


図 1-30 月別の住宅火災件数と死傷者数

イ 時間帯別の住宅火災による死傷者発生状況

- ▶ 時間帯別（不明を除く。）に死者の発生状況をみると、2時から9時までの間に死者が多い傾向にある
- ▶ 特に、2時から3時台、6時から9時台までの時間帯は、死者発生率が高くなっている
- ▶ 時間帯別（不明を除く。）に負傷者の発生状況をみると、時間帯に関係なく負傷者は発生している
- ▶ 負傷者発生率でみると2時から3時台が42.9%と高くなっている

（表 1-20、図 1-31）

表 1-20 時間帯別死傷者発生状況

出火時間帯	0 ～ 1	2 ～ 3	4 ～ 5	6 ～ 7	8 ～ 9	10 ～ 11	12 ～ 13	14 ～ 15	16 ～ 17	18 ～ 19	20 ～ 21	22 ～ 23	不明	合計
死者数	6	10	7	11	10	2	5	3	4	5	1	5	2	71
死者発生率※1	6.3%	8.6%	6.6%	8.4%	8.0%	1.8%	3.1%	2.1%	3.0%	3.0%	0.6%	4.2%	1.3%	3.8%
高齢者死者数	5	6	6	7	8	2	4	1	4	3	1	4	1	52
負傷者数	28	45	51	41	40	31	44	45	35	40	52	43	11	506
負傷者発生率※2	26.3%	42.9%	38.2%	30.5%	25.9%	22.9%	22.7%	23.6%	21.8%	21.7%	26.9%	27.1%	6.7%	24.4%
高齢者負傷者数	12	13	16	10	19	13	17	20	11	13	13	14	7	178
住宅火災件数	95	70	76	95	112	109	163	144	133	166	175	118	150	1606
死者発生住宅火災件数	6	6	5	8	9	2	5	3	4	5	1	5	2	61
負傷者発生住宅火災件数	25	30	29	29	29	25	37	34	29	36	47	32	10	392

※1 死者発生率＝死者発生住宅火災件数／住宅火災件数

※2 負傷者発生率＝負傷者発生住宅火災件数／住宅火災件数

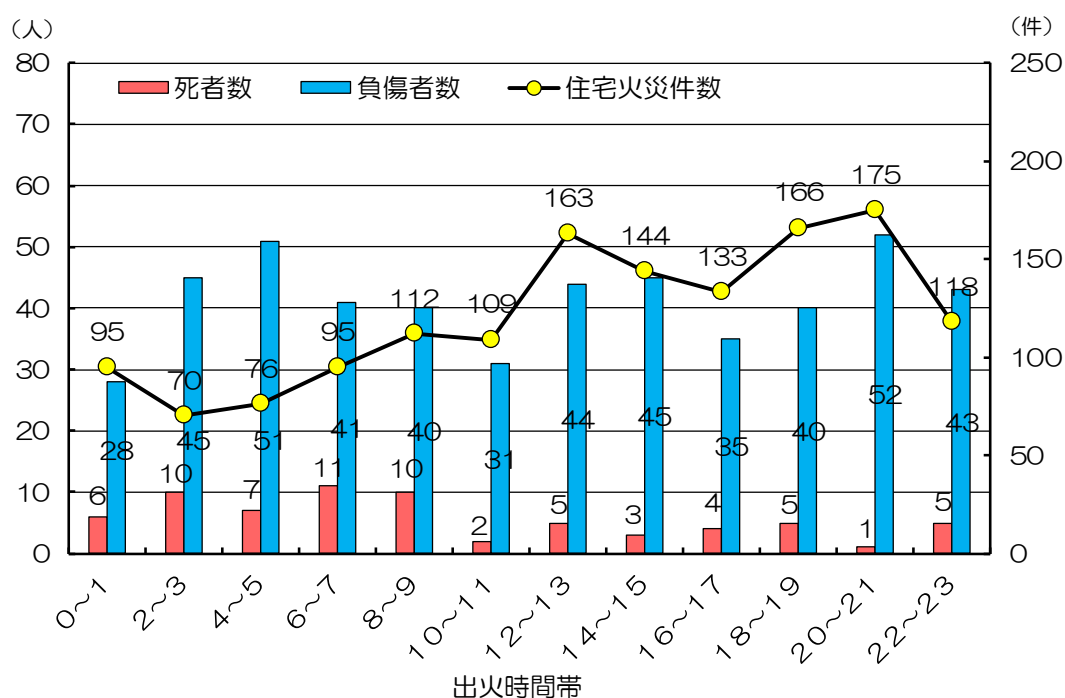


図 1-31 時間帯別の住宅火災件数と死傷者数

(6) 年齢別・性別等

ア 住宅火災による死傷者における受傷程度別高齢者の割合

- 受傷程度が重くなるにつれ、高齢者の割合が増加している。(表 1-21)

受傷程度	高齢者	高齢者以外	総計	高齢者の割合
軽症	82	235	317	25.9%
中等症	58	62	120	48.3%
重症	31	28	59	52.5%
重篤	7	3	10	70.0%
死亡	52	19	71	73.2%
総計	230	347	577	39.9%

表 1-21 令和4年中住宅火災における死傷者の程度種別

イ 焼損程度別の住宅火災死者発生状況

- 火災焼損程度別で死者発生状況をみると、全焼で 22 人、半焼で 15 人、部分焼で 27 人、ぼや 7 人発生している
- 焼損被害が比較的少ない部分焼やぼや火災においても死者が発生している

ウ 年齢別の住宅火災による死者発生状況

- 死者発生状況をみると、住宅火災による死者 71 人のうち 65 歳以上の高齢者が 52 人(73.2%)と全体の約 7 割を占めている
- 65 歳以上 75 歳未満の前期高齢者が 21 人、75 歳以上の後期高齢者が 31 人で、後期高齢者の方が多くなっている

(表 1-22)

エ 性別による住宅火災死者発生状況

- 男性が 43 人(60.6%)、女性が 28 人(39.4%)発生
- 男性全体 43 人に対し、高齢者男性が 29 人(67.4%)、女性全体 28 人に対し高齢者女性が 23 人(82.1%)となっている

(表 1-22、図 1-32)

表 1-22 年齢別死者発生状況

年齢別	死者数	火災焼損程度				性別	
		全焼	半焼	部分焼	ぼや	男性	女性
高齢者以外	0 ~ 5	-	-	-	-	-	-
	6 ~ 9	-	-	-	-	-	-
	10~19	-	-	-	-	-	-
	20~29	2	1	-	1	2	-
	30~39	1	1	-	-	1	-
	40~49	2	-	1	1	1	1
	50~59	12	5	-	6	1	3
	60~64	2	1	-	1	1	1
前期高齢者	65~69	8	3	2	3	4	4
	70~74	13	3	4	5	10	3
後期高齢者	75~79	12	3	4	4	7	5
	80~89	12	3	3	5	3	9
	90 ~	7	2	1	1	5	2
合計	71	22	15	27	7	43	28

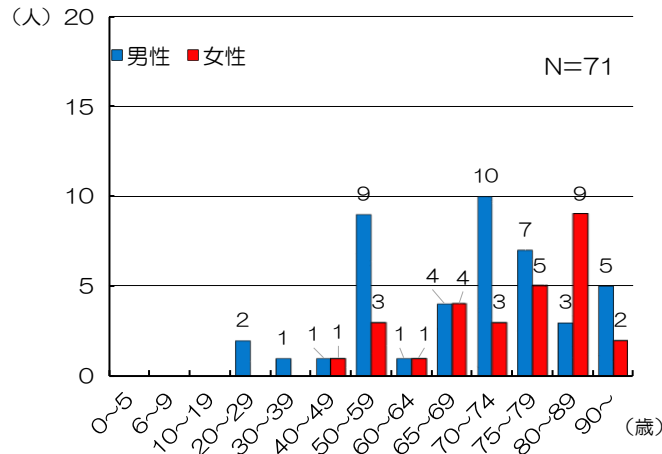


図 1-32 年齢別・男女別死者発生状況

(7) 世帯構成別の死者発生状況

住宅火災が発生した世帯の構成を、「一人暮らし（高齢者を除く。）」、「高齢者を含む家族」、「高齢者夫婦のみ」及び「高齢者一人暮らし」及び「その他」に分ける。このうち、「高齢者一人暮らし」と「高齢者夫婦のみ」の世帯を合わせて「高齢者のみの世帯」と呼ぶ。

- 令和4年中の死者発生状況は「高齢者を含む家族」世帯で最も多いが、過去5年を合計すると「高齢者一人暮らし」世帯で最も多く発生している
- 令和4年中は住宅火災のうち約5割が「高齢者のみの世帯」で発生しており、過去5年をみても約5割前後で推移している

(図 1-33)

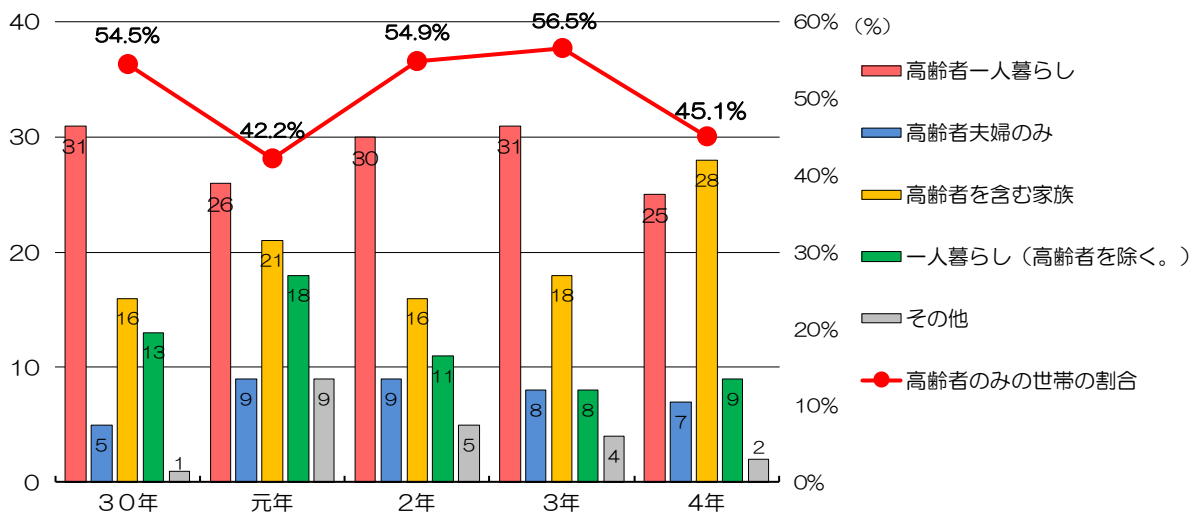


図 1-33 過去5年間における世帯構成別の住宅火災による死者発生状況

(8) 住宅火災発生時の行為別

ア 行為別の住宅火災による死者発生状況(死者 71 人中)

- 「就寝中」が7人(9.9%)と最も多い
- 次いで「休息・休憩中」が4人(5.6%)、「避難中」が4人(5.6%)と続く
(表 1-23)

- 「就寝中」には、「たばこ」によるものが3件発生
(表 1-24)

布団等に落ちたたばこの火種は、しばらく無炎燃焼（炎を出さずに燃え広がること）を続け、気付いた時には室内に一酸化炭素等の有毒ガスが充満して、避難行動がとれずに命を落とす危険がある。

表 1-23 死者の行為状態

住宅火災時の行為	死者数 (高齢者数)	割合
就寝中	7(6)	9.9%
休憩・休憩中	4(4)	5.6%
避難中	4(3)	5.6%
飲食中	1(1)	1.4%
家事従業中	1(1)	1.4%
火災通報中	1(1)	1.4%
作業中	1(1)	1.4%
初期消火中	1(1)	1.4%
その他	4(4)	5.6%
不明	47(30)	66.2%
合計	71(52)	100.0%

表 1-24 就寝中の死者発生原因

出火原因	死者数 (高齢者数)	高齢者割合
たばこ	3(2)	28.6%
ストーブ	1(1)	14.3%
コード	1(1)	14.3%
その他	1(1)	14.3%
不明	1(1)	14.3%
合計	7(6)	85.7%

イ 行為別の住宅火災による負傷者発生状況(負傷者 506 人中)

- 「初期消火中」が129人(22.5%)と最も多い
- 次いで「家事従業中」が74人(14.6%)、「就寝中」が68人(13.4%)と続く
(表 1-25)
- 負傷者が最も多く発生した「初期消火中」は、消火に手間取ったことにより負傷したものが最も多くなっている

(表 1-26)

表 1-25 負傷者の行為状態

住宅火災時の 行為	負傷者数 (高齢者数)	割合
初期消火中	129(30)	25.5%
家事従業中	74(41)	14.6%
就寝中	68(26)	13.4%
避難中	49(13)	9.7%
作業中	44(16)	8.7%
休憩・休憩中	31(11)	6.1%
飲食中	6(1)	1.2%
火災通報中	4(1)	0.8%
救助中	4(1)	0.8%
見物中	3(2)	0.6%
自損を喫った	3(0)	0.6%
消防隊に協力中	3(0)	0.6%
火遊び中	1(0)	0.2%
その他	44(15)	8.7%
不明	43(21)	8.5%
合計	506(178)	100.0%

表 1-26 初期消火中の負傷者発生状況

出火原因	死者数 (高齢者数)	高齢者割合
消火に手間取った	50(10)	7.8%
火に接近しすぎた	39(10)	7.8%
消火のため燃焼物 に触れた	23(7)	5.4%
救助に手間取った	1(0)	0.0%
煙、ガスを吸い動 けなかった	1(0)	0.0%
その他	13(3)	2.3%
不明	2(0)	0.0%
合計	129(30)	23.3%

初期消火は

「自身に危険が及ばない範囲」で行い、危険を感じたらすぐに避難することが大切。

4 住宅火用火災警報器等の概要

(1) 住宅火災警報器等の設置率及び住宅火災の件数の推移

住宅用火災警報器（以下、住警器という。）等※の設置率及び住宅火災件数の推移について、平成 12 年から、令和 4 年までの推移をみる。

※ 住警器等とは、自動火災報知設備（以下、自火報という。）等を含む。

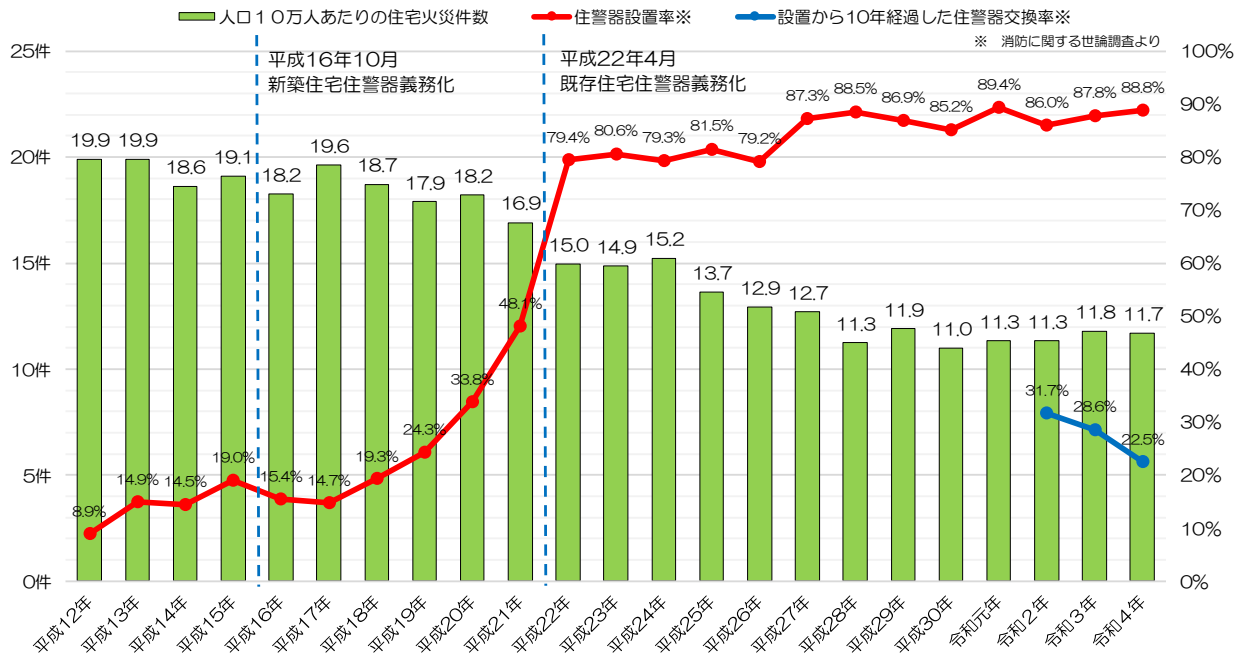


図 1-34 住警器等設置率と人口 10 万人あたりの住宅火災件数の推移（平成 12 年～令和 4 年）

- 住警器等の設置率上昇に伴い、人口 10 万人あたりの住宅火災件数は減少している
- 住警器等の設置率は平成 27 年から約9割で推移しており、高止まりとなっている
- 平成 28 年以降の人口 10 万人あたりの住宅火災件数は、平成 28 年以降 11 件台で推移している
- 令和 2 年以降に実施した消防に関する世論調査における設置から 10 年を経過した世帯の住警器の交換率を見ると、交換率は減少している

（図 1-34）

(2) 住宅火災における住警器等の設置状況

ア 住警器等の設置有無別住宅火災件数及び死者数

住宅火災 1,606 件と住宅火災による死者 71 人（自損を除く。）を、住警器等の設置有無別にみる。

- 住警器が設置（一部設置を含む）されていた住宅火災は 738 件(46.0%)、死者は 22 人(31.0%)発生
- 自火報等が設置されていた住宅火災は 521 件(32.4%)、死者は 10 人(14.1%)発生
- 住警器等が未設置（設置不明を含む）だった住宅火災は 347 件(21.6%)発生し、死者は 39 人(54.9%)発生

（図 1-35、図 1-36）

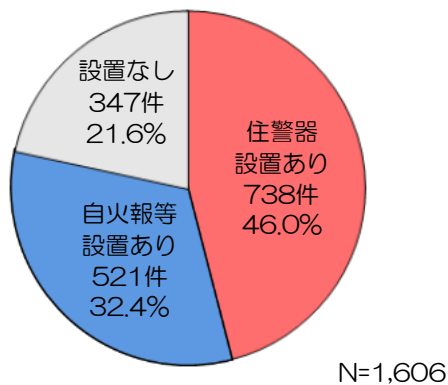


図 1-35 住警器等設置有無別住宅火災件数

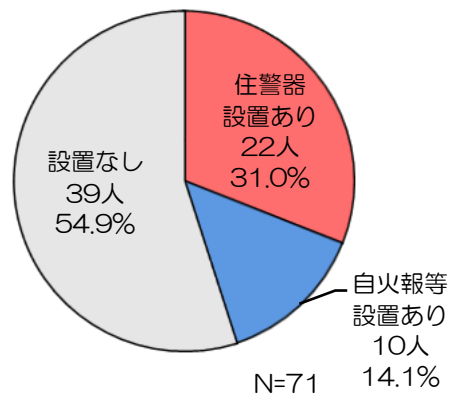


図 1-36 住警器等設置有無別死者数

イ 住警器等設置有無別死傷者の発生状況

住警器等設置有無別に、死傷者等の発生割合をみる。

- 住警器等未設置の住宅火災件数は **347 件**発生
- 住警器等未設置のうち、死者発生火災件数は **33 件(9.5%)**、負傷者のみの発生件数は **114 件(32.9%)**発生
- 住警器等設置の住宅火災件数は **1259 件**発生
- 住警器等設置のうち、死者発生火災件数(死者及び負傷者の両方が発生した火災を含む。)は **28 件(2.2%)**、負傷者のみの発生件数は **278 件(22.1%)**発生

(図 1-37)

以上のことから、住警器等未設置の方が、死傷者が発生する件数の割合が高いことが分かる。

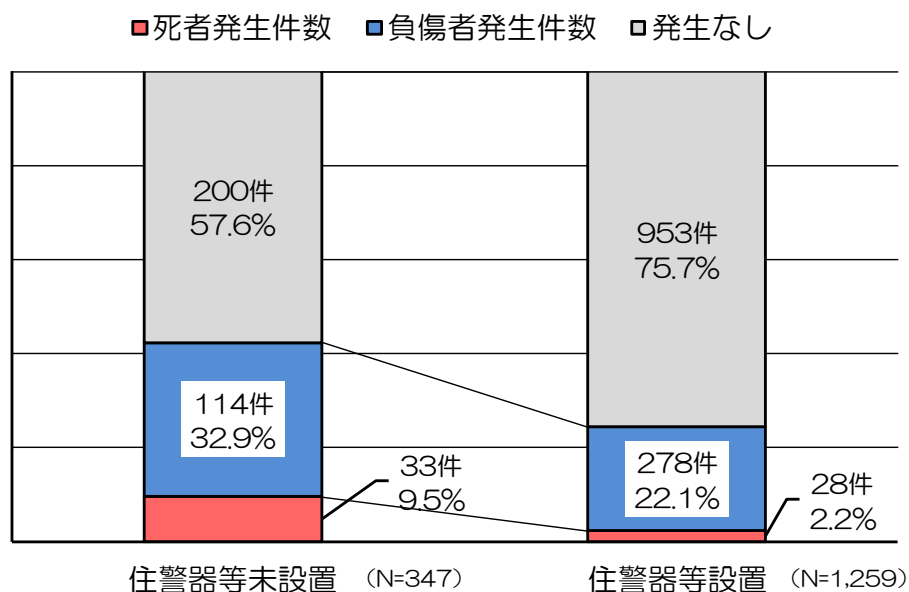


図 1-37 住警器等設置有無別の死者及び負傷者が発生した住宅火災件数

(3) 住警器等設置有無別焼損等の比較

住警器等設置住宅における火災と住警器等未設置住宅における火災について比較する。

- 火災 1 件あたりの平均焼損床面積について、住警器等未設置住宅は **20.2 m²**であるのに対し、設置住宅では約 **1/5** の **4.4 m²**となっている
- 火災 1 件あたりの平均損害額について、住警器等未設置住宅では **383 万円**であるのに対し、設置住宅では約 **1/4** の **83 万円**となっている
- 火災 100 件あたりの死者発生火災件数について、住警器等未設置住宅では **9.5 件**であるのに対し、設置住宅では約 **1/4** の **2.2 件**となっている

(図 1-38~図 1-40)

以上のことから、住警器等の設置は火災の被害軽減に効果的であることが分かる。

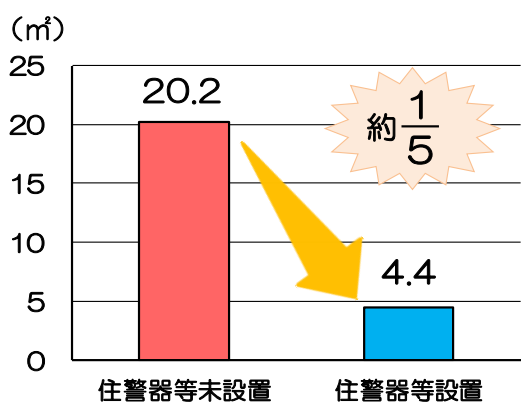


図 1-38 住警器等設置有無別の火災 1 件あたりの平均焼損床面積の比較

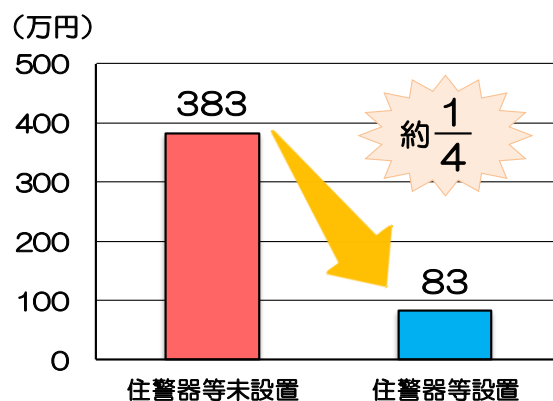


図 1-39 住警器等設置有無別の火災 1 件あたりの平均損害額の比較

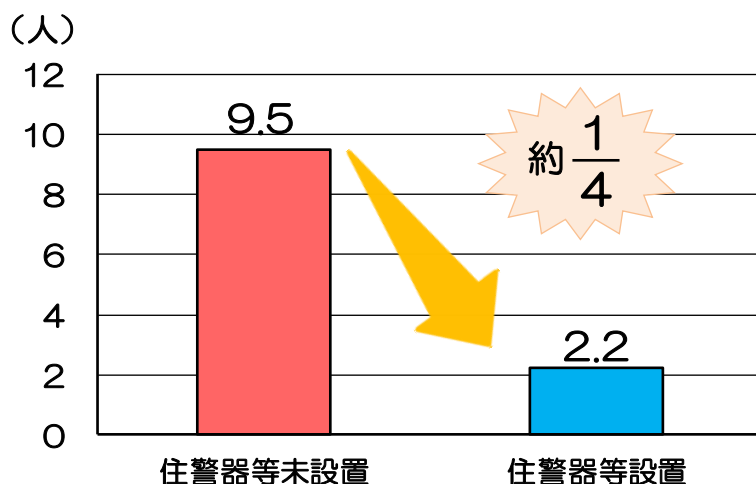


図 1-40 住警器等設置有無別の火災 100 件あたりの死者発生火災件数の比較

(4) 住警器全部設置・一部設置の焼損等比較

住警器が設置されていた住宅火災 738 件の住警器設置状況について、火災予防条例で定められたとおりに全ての居室、台所、階段に設置されている住宅（以下「全部設置」という。）と、一部のみに設置されている住宅（以下「一部設置」という。）で比較する。

ア 設置状況別焼損程度

- 住宅火災のうち全部設置が **574 件(77.8%)**、一部設置が **164 件(22.2%)**
- 火災焼損程度別にみると、全部設置だった火災**574 件中**、全焼及び半焼は計 **19 件(3.3%)**に対し、一部設置だった火災 **164 件中**、全焼及び半焼は計 **13 件(7.9%)**

(図 1-41、図 1-42)

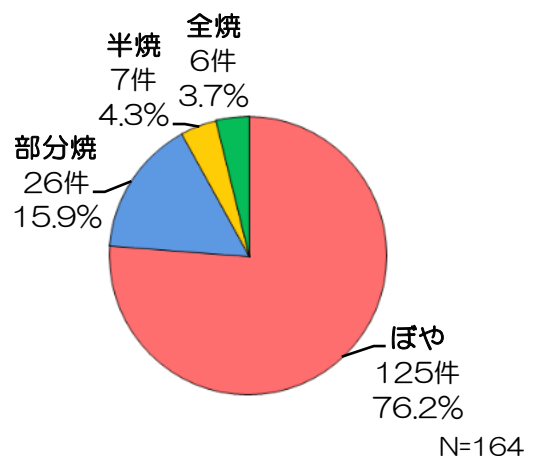
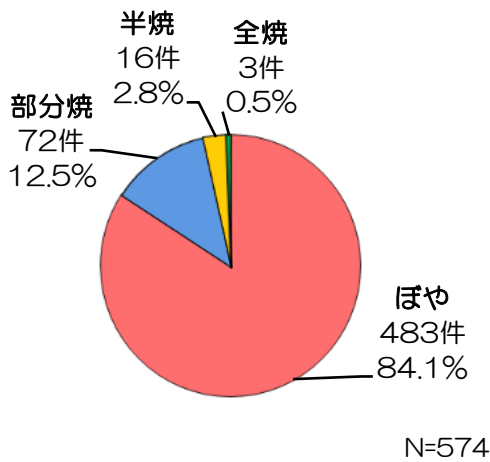


図 1-41 住警器全部設置住宅の火災焼損程度 図 1-42 住警器一部設置住宅の火災焼損程度

イ 設置状況別火災 100 件あたりの死者発生火災件数

住警器の全部設置と一部設置の設置状況別に死者発生火災件数を比較する。

全部設置では 574 件中 14 件で死者が発生し、一部設置では 164 件中 5 件で死者が発生している。

- 一部設置では **3.0 件**に対して、全部設置では **2.4 件**発生
- 全部設置の住宅で死者発生火災件数が**約2割減少**

(図 1-43)

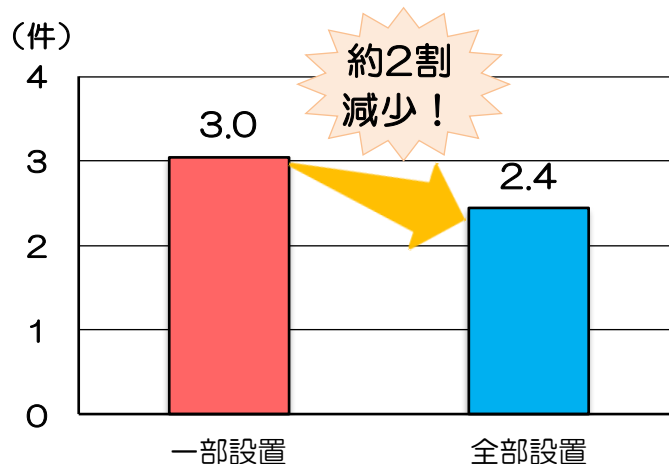


図 1-43 住警器設置状況別火災 100 件あたりの死者発生火災件数

(5) 奏功事例の内訳

消防に関する世論調査（令和4年）によると、東京消防庁管内の住警器等設置率は88.8%となっている。

- 令和4年中の住宅火災1,606件のうち、住警器が設置されていた住宅火災**738件**あり、さらに、住警器が作動し奏効した事例は**287件**発生した
- 住警器が奏効した住宅火災を火災焼損程度別にみると、ぼやが**220件(76.7%)**と約**8割**を占める

(図1-44)

- 住警器が奏効した住宅火災を出火箇所別にみると、居室等で**123件(42.9%)**、台所・キッチン等で**140件(48.8%)**発生し、これらを合わせると**9割以上**を占める。

(図1-45)

住警器の鳴動は、隣人や通行人等、居住者以外が住警器の鳴動音に気づくことで、火災の早期発見、被害の軽減に繋がった事例もある。

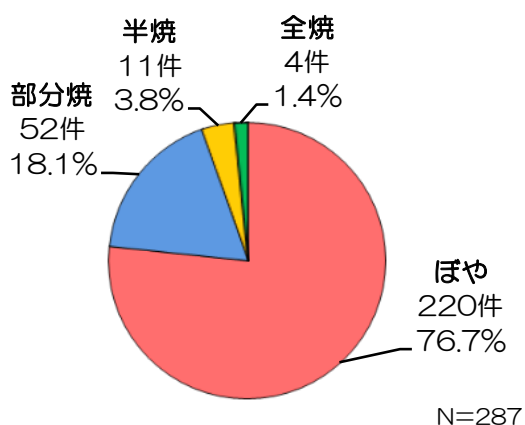


図1-44 火災焼損程度別の奏功事例

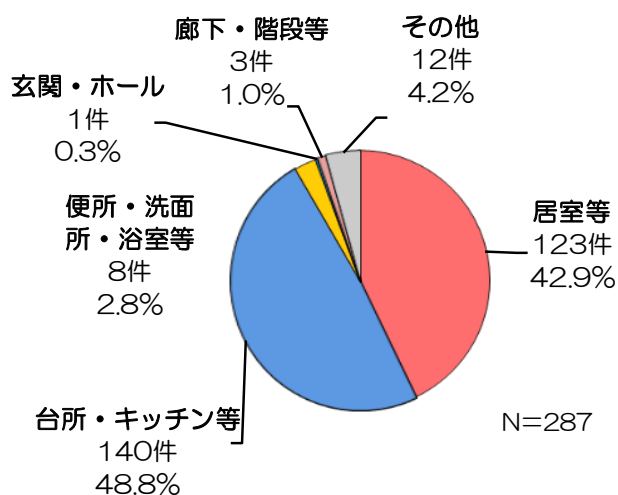


図1-45 出火箇所別の奏功事例

5 住宅火災から身の安全を守るためにできること

火の出る場所を知る

東京消防庁管内では平成30年から令和4年までの5年間に住宅火災による死者が360名発生し、出火原因の約半数(181名)がたばこ・ストーブ・こんろ・コードによるものです。

たばこ 住宅火災の死者発生率第1位

火種は微小なものでも無煙燃焼が続き、気づかぬうちに大きな炎へと拡大します。

- ☑ 寝たばこは絶対にしない。
- ☑ 吸い殻は水に浸けて完全に消火する。
- ☑ 禁煙、加熱式たばこへの切替も考える。



ストーブ 約8割は電気ストーブ

布団などの可燃物が接触し火災に至る事例が多く発生しています。

- ☑ 周囲には燃えやすいものを置かない。
- ☑ ストーブの近くで洗濯物を干さない。
- ☑ 外出時や就寝時は必ず消す。



こんろ 出火原因第1位

目を離したり、油断した時が要注意!

- ☑ 安全機能(Siセンサー)付こんろを使用する。
- ☑ 調理中はこんろから離れない。
- ☑ 周囲を整理整頓し、可燃物を置かない。
- ☑ 鍋底から火がはみ出さないよう調節する。



コード 身近に潜み知らぬ間に出火

劣化したり、負荷が強くなることで出火する可能性が!

- ☑ 家具の下敷きや折れ曲がりに注意する。
- ☑ 電源タップは決められた容量内で使用する。
- ☑ コードまわりを定期的に点検・清掃する。
- ☑ 束ねて使用しない。



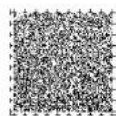
いま、備えよう。火災から命を守る3つの住宅防火対策。

消火器での有効な初期消火を ～火を使う場所に備えましょう～

いざという時に確実に消火できるよう、住宅内に消火器を備えましょう。また、使い方も定期的に確認しましょう。



- 初期消火のポイント
- ① 自身に危険が及ばない範囲で消火を行いましょう。
 - ② 消火剤は燃えているものに向けて噴射しましょう。
 - ③ 消火剤は最後まで使い切りましょう。



住宅用火災警報器で火災の早期発見を ～鳴らない住宅用火災警報器が増えています！～

住宅用火災警報器は、煙や熱を感じし、音声や警報音で火災の発生を知らせます。



- 設置場所は全ての居室・台所・階段です。
- 定期的に作動確認をしましょう。
- 設置後10年を経過したものは機器本体を交換しましょう。



または



半年に1回以上の作動確認で、正常に動くか確認しましょう!

※ 作動確認時の音声は自動で停止します。

防災品で延焼拡大防止を ～防災マークが目印です～

防災品ラベルは2種類あります



提供：日本防災協会
※ ラベルには様々な様式があります。

防災品とは、火に近づけても着火しにくく、着火しても延焼拡大を停止する特性のある品物です。カーテンやカーペットなどの布製品に取り入れましょう。



第2章 放火火災の実態

1 放火火災の概要

令和4年中の総火災件数 3,953 件のうち放火（放火の疑いを含む。）火災は **601 件**でした。

- 放火火災件数は減少傾向にあるが、令和4年中の総火災件数に占める放火の件数は令和3年に比べて **11 件増加**

(図 2-1)

- 放火火災 601 件の内訳は、その他火災 **381 件(63.4%)**、建物火災 **207 件(34.4%)**、車両火災 **11 件(1.8%)**、林野火災 **2 件(0.3%)**となった

※ 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上しています。

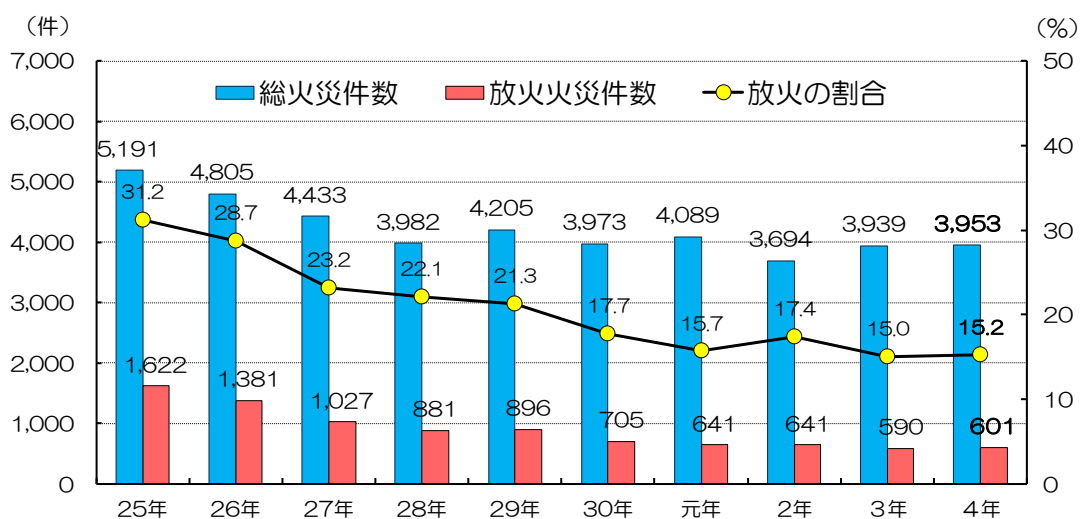


図 2-1 過去 10 年間における放火火災件数の推移

2 放火火災の発生状況

(1) 月別発生状況(5年累計)

- 放火火災は 11 月から増え始め、12 月から 3 月までの火災多発期に多く発生
- 建物外からの出火の割合が多く、特に 12 月が 7 割を超えている

(図 2-2)

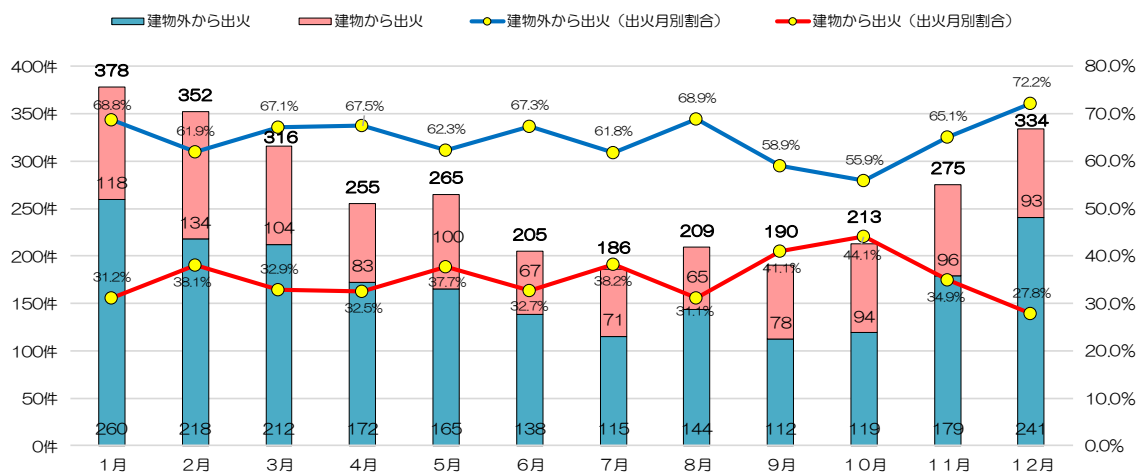


図 2-2 月別の放火火災発生状況（平成 30 年から令和 4 年まで）

【参考資料】出火月別 放火火災状況（平成30年から令和4年まで）

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総計	放火件数
令和4年	建物外	62	34	38	18	30	27	22	28	25	34	48	48	414	601
	建物内	12	20	11	10	25	13	14	12	13	16	19	22	187	
令和3年	建物外	46	55	52	51	24	23	26	20	21	19	27	43	407	590
	建物内	20	19	24	20	15	8	9	8	11	14	20	15	183	
令和2年	建物外	52	40	43	25	22	18	19	43	21	21	29	51	384	641
	建物内	28	41	27	25	16	10	16	16	18	16	22	22	257	
令和元年	建物外	47	45	39	39	41	43	10	25	24	18	37	43	411	641
	建物内	28	25	21	17	17	16	19	14	14	24	18	17	230	
平成30年	建物外	53	44	40	39	48	27	38	28	21	27	38	56	459	705
	建物内	30	29	21	11	27	20	13	15	22	24	17	17	246	

(2) 曜日別発生状況(5年累計)

- 土、日、月曜日に多い傾向にあるが、若干の上下はあるものの一様に発生
- 曜日による出火場所の変動は見られない

(図 2-3)

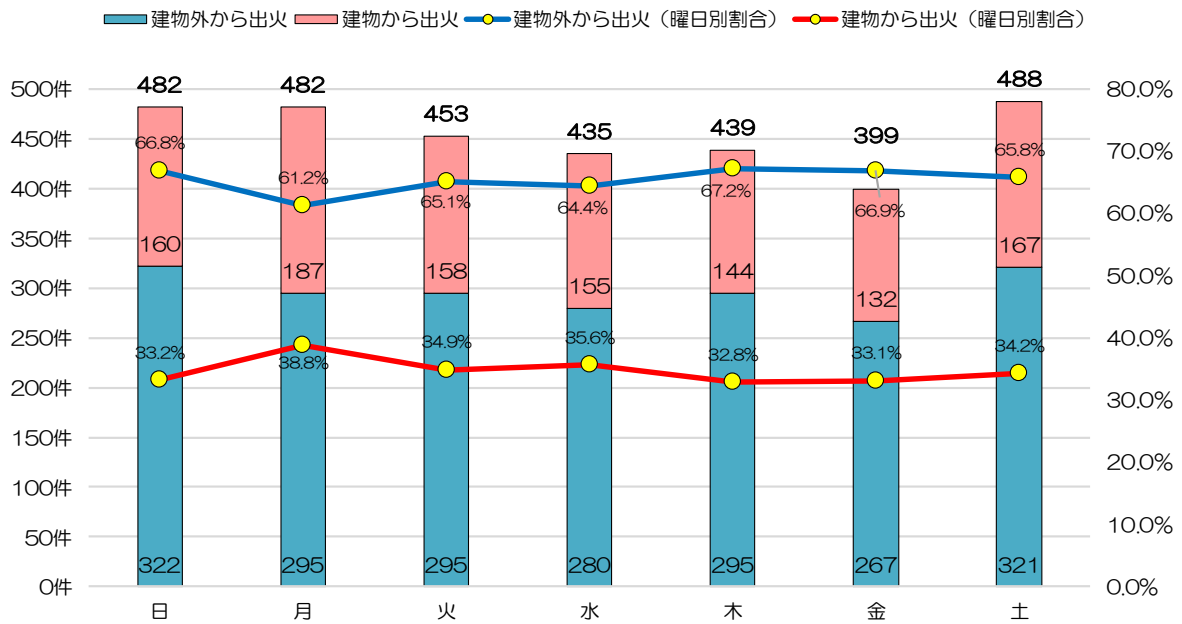


図 2-3 曜日別の放火火災発生状況（平成30年から令和4年まで）

【参考資料】出火曜日別 放火火災発生状況（平成30年から令和4年まで）

		月	火	水	木	金	土	総計	放火件数
令和4年	建物外	61	62	63	50	68	51	59	601
	建物内	34	27	24	24	27	17	34	
令和3年	建物外	46	62	57	57	66	61	58	590
	建物内	16	36	26	26	30	21	28	
令和2年	建物外	63	56	68	48	43	48	58	641
	建物内	34	45	46	38	29	34	31	
令和元年	建物外	71	47	54	54	54	50	81	641
	建物内	38	35	33	32	31	27	34	
平成30年	建物外	81	68	53	71	64	57	65	705
	建物内	38	44	29	35	27	33	40	

(3) 時間帯別発生状況

過去5年累計 3178件中、出火時間が不明であった 864 件を除いた 2314 件の放火火災を時間帯別にみる。

- 12時台から5時台までの午後から早朝にかけての時間帯に放火火災が多く発生し、建物外からの出火が約6割～7割を占めている。

(図 2-4)

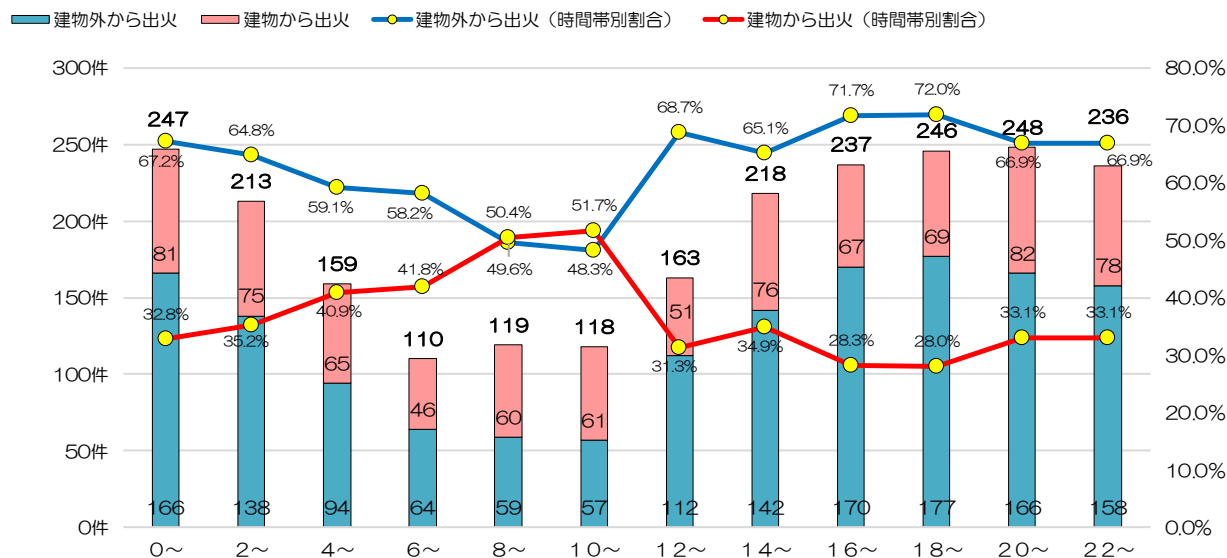


図 2-4 時間帯別の放火火災発生状況 (平成 30 年から令和 4 年まで)

【参考資料】 出火時間帯別 放火火災件数 (平成 30 年から令和 4 年まで)

		0~	2~	4~	6~	8~	10~	12~	14~	16~	18~	20~	22~	不明	総計	放火件数
令和 4 年	建物外	34	23	12	11	16	8	27	28	32	32	40	26	125	414	601
	建物内	10	15	13	12	16	11	11	14	8	14	12	7	44	187	
令和 3 年	建物外	33	29	18	8	4	13	26	26	20	39	42	35	114	407	590
	建物内	16	9	10	8	9	10	4	12	16	13	8	13	55	183	
令和 2 年	建物外	25	21	22	10	11	8	16	32	40	28	23	29	119	384	641
	建物内	18	21	17	9	14	13	12	19	13	14	21	16	70	257	
令和 元年	建物外	30	34	21	20	10	16	25	32	33	33	37	37	83	411	641
	建物内	22	7	15	8	12	15	17	17	11	16	22	21	47	230	
平成 30 年	建物外	44	31	21	15	18	12	18	24	45	45	24	31	131	459	705
	建物内	15	23	10	9	9	12	7	14	19	12	19	21	76	246	

(4) 連続放火火災の発生状況

令和4年中、同一日とその翌日までに、同一地域内で5件以上放火された連続放火火災は**5回発生**している。

(表 2-1)

表 2-1 主な連続放火火災の発生状況

発生月	区市町村	出火箇所	焼損物件	連続件数
3月	練馬区	共同住宅敷地内	枯草、シート等	5
3月	調布市	共同住宅敷地内	掲示物、トイレトペーパー	5
8月	墨田区	歩道	立木、掲示物	6
10月	葛飾区	空家敷地内	枯草等	6
11月	あきる野市	田畑	枯草等	7

(5) 主な火元建物用途別の発生状況

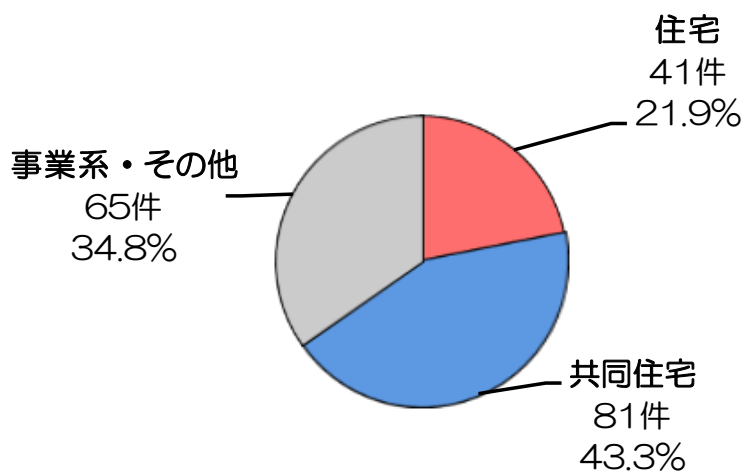
放火火災 601 件のうち、建物から出火した放火火災 **187 件**を主な建物用途別にみる。

- 住宅 **41 件(21.9%)**、共同住宅 **81 件(43.3%)**、事業系・その他 **65 件(34.8%)**
- **6 割以上**が住宅及び共同住宅から発生

(表 2-2、図 2-5)

表 2-2 火元建物用途別発生状況

火元用途		放 火	建物から 出火した火災	放 火 件 数 / 火 災 件 数
居 住 系	住 宅	41	588	7.0%
	共 同 住 宅	81	1018	8.0%
事 業 系	事 務 所	23	263	8.7%
	百 貨 店 ・ 物 販 等	4	110	3.6%
	停 車 場	3	31	9.7%
	病 院 等	0	24	0.0%
	飲 食 店	1	289	0.3%
	学 校	0	30	0.0%
	倉 庫	1	18	5.6%
	ホ テ ル ・ 簡 易 宿 泊 所	2	51	3.9%
	作 業 所	0	93	0.0%
	そ の 他	4	72	5.6%
そ の 他	共 用 部 分	17	145	11.7%
	付 属 建 物 等	8	22	36.4%
	空 家	1	4	25.0%
	そ の 他	1	20	5.0%
合 計		187	2,778	6.7%



N=187

図 2-5 建物から出火した放火火災内訳

(6) 主な放火場所と着火物

放火火災 601 件中の主な出火場所と着火物をみる。

- 放火場所が建物関係（主として建物の箇所）の放火火災は **187 件(31.1%)**で全体の約 **3割**を占める
- 建物関係 187 件のうち、最も多い放火場所は共用部分及び住宅部分の **68 件(36.4%)**、これら 2 つを合わせると全体の約 **7割**を占める
- 放火場所が建物関係以外（主として建物以外の箇所）の放火火災は **414 件(68.9%)**と全体の約 **7割**を占める
- 建物関係以外 414 件のうち、最も多い放火箇所は敷地内 **156 件(37.7%)**、次いで公園・墓地 **110 件(26.6%)**、道路 **67 件(16.2%)**等となる
- 着火物別にみると（その他・不明を除く）、「ごみくず」、「紙・紙製品類」「枯草等」、「合成樹脂製品等」の順で多く発生

(表 2-3)

表 2-3 主な放火場所と着火物

放火場所		着火物	ごみくず	紙・紙製品類	合成樹脂製品等	枯草等	繊維類	くず類	車両関係	その他	不明	合計
建物関係	共用部分		5	27	10	1	9	3	0	10	3	68
	住宅部分		6	13	5		26	1	0	11	6	68
	建物の外周部		1		2		1		0	1		5
	物置・倉庫		7	1		1	1		0	1	1	12
	バルコニー・屋上				1		3		0	1		5
	車庫・駐車場		2	1	2	1	2		0			8
	その他			7	1	2	3	2		5	1	21
	小計		21	49	21	5	45	6	0	29	11	187
建物関係以外	敷地内		32	15	39	25	8	12	2	23		156
	公園・墓地		28	17	4	34	5	10		12		110
	道路		17	6	7	5	10	7		13	2	67
	河川敷		6	1		12	2	3		2	1	27
	車両								4	2	1	7
	屋外ごみ捨場		7	2						1		10
	その他		6	5	5	14	1	3		3		37
	小計		96	46	55	90	26	35	6	56	4	414
合計		117	95	76	95	71	41	6	85	15	601	

事例編

1 主な住宅火災の事例

(1) たばこ

【事例 1】寝たばこにより死者が2名発生した住宅火災の事例

火災の程度	全焼	死傷者の発生状況	死者2名あり
<p>この火災は、住宅で3人暮らしの居住者 A（男性・50代）が、布団の上でたばこを吸い、そのまま寝入ってしまったため、火種が布団上に落下し火災となりました。この火災により、居住者 A・B の2人がやけどにより亡くなりました。</p> <p>異変に気付いた居住者 B（女性・80代）は布団が燃えているのを発見し、自宅の固定電話から119番通報しましたが、その後住宅内で亡くなっているのを発見されました。</p>			

【事例 2】たばこの不始末により死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、長屋兼共同住宅で1人暮らしの居住者（男性・70代）が、ベッド上のテーブルにあったガラス製の灰皿に消火不十分な吸い殻を放置したことで、無煙燃焼が継続し、灰皿が熱で割れたことで、火種がふとんの上に落下し出火し火災となりました。この火災により、居住者1人が一酸化炭素中毒で亡くなりました。</p> <p>訪問介護職員が居住者宅を訪問したところ、ベッドの横で倒れている居住者を発見し、携帯電話から119番通報しました。この建物における住宅用火災警報器の設置はありませんでした。</p>			

(2) こんろ

【事例 1】可燃物の接触により死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	部分焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、共同住宅で1人暮らしの居住者（女性・80代）が調理中に、何らかの原因で可燃物がこんろの火に接触し着火したことで火災になりました。この火災で居住者1名が一酸化炭素中毒で亡くなっています。</p> <p>当該建物向かいに居住する男性は、自宅のベランダでたばこを吸っていたところ、建物の窓から煙が出ているのを発見し、自身の携帯電話から119番通報しました。この建物における住宅用火災警報器の設置はありませんでした。</p>			

【事例 2】着衣着火により負傷者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	負傷者あり
<p>この火災は、専用住宅で2人暮らしの居住者 A（男性・80代）が、こんろでやかんに火をかけ、換気扇の電源の紐を操作したところ、着ていた T シャツの脇腹部分に炎が着火し火災となりました。この火災で居住者 A がやけどを負いました。</p> <p>隣の部屋にいた居住者 B（女性・80代）は近くにあったタオルを台所の流し台で濡らし、居住者 A の体に当て消火しました。その後、自宅の固定電話から119番通報しました。</p>			

(3) ストープ

【事例 1】電気ストーブに可燃物が接触したことにより死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	部分焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、共同住宅で1人暮らしの居住者（男性・70代）が電気ストーブを付けたまま、床に入ったところ、布団が電気ストーブのヒータ部に接触し、火災となりました。この火災により、居住者1名がやけどにより亡くなりました。</p> <p>当該建物の隣に居住する男性は自宅でテレビを観ていたところ、爆発音が聞こえたため外に出て周囲を確認すると、共同住宅の2階から炎と黒煙が見え、自動火災報知設備も鳴動していたため、自身の携帯電話で119番通報しました。</p>			

【事例 2】電気ストーブをこたつの中に入れて火災が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし
<p>この火災は、共同住宅の居住者が暖をとるため、こたつの中に電気ストーブを入れスイッチを入切し温度調節をしていたところ眠ってしまい、こたつの布団に電気ストーブのヒータ部が接炎し火災となりました。</p> <p>住宅用火災警報器の鳴動音を聞いた居住者はこたつの布団が燃えているのに気づき、はたいて消火した後、自身の携帯電話から119番通報しました。</p>			

(4) その他の出火原因

【事例 1】トラッキングにより死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	部分焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、共同住宅で2人暮らしの居住者 A（女性・70代）が、壁付コンセントに接続されていたマルチタップからトラッキングが原因で出火し火災となりました。この火災により、居住者 A が一酸化炭素中毒で亡くなりました。居住者 B は外出中でした。</p> <p>同共同住宅の隣人は、自宅にいたところガス漏れ警報器の火災機能が鳴動し、慌てて外に出ると当該部屋の開口部から煙が出ていたため、自宅の固定電話から119番通報をしました。</p>			

【事例 2】スプレー缶のガスに引火し負傷者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	負傷者あり
<p>この火災は、共同住宅で2人暮らしの居住者 A（男性・60代）が、自宅のシュレッダーが目詰まりしていたため、潤滑スプレーを紙投入口に噴射し、5～10分放置後、動作確認のためスイッチを数回入れたところ、「ドン」という音と共に炎が立ち上がり火災となりました。この火災で居住者 A がやけどで負傷しました。</p> <p>居住者 B（女性・60代）は、「ドン」という音とともに居住者 A が負傷したと訴えてきたため、自身の携帯電話から119番通報をしました。</p>			

【事例3】ロウソクの転倒により負傷者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	部分焼	死傷者の発生状況	負傷者あり
<p>この火災は、住宅で1人暮らしの居住者（女性・80代）が、居室内で仏壇のロウソクを付けたままその場を離れたところ、ロウソクの火が仏壇の膳引きに着火し、火災となりました。この火災で居住者1名が負傷しました。</p> <p>居住者は台所で食事中、「パチパチ」という音に気づき居室内に行くと、仏壇付近から火が出ているのを発見しました。自動火災報知設備の音を聞きつけた近隣住民は、外にでると当該建物の窓から煙と炎が出ているのを確認し、自身の携帯電話で119番通報しました。併せて共同住宅に設置されている消火器4本で初期消火を試みるも、火は完全に消えませんでした。</p>			

2 住宅用防災機器等の主な奏功事例

(1) 住宅用火災警報器

【事例1】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、隣人と協力し通報につながった事例

火災の程度	非火災	死傷者の発生状況	なし
発見者	居住者	通報者	隣人
		初期消火	
<p>この火災は、共同住宅で1人暮らしの居住者（男性・40代）が、ゆで卵を作ろうと鍋に火をかけたまま失念したため、煙が発生し住宅用火災警報器が鳴動したことにより、気づき火を止めることができました。</p> <p>同共同住宅の隣人は、当該部屋前を通ったところ、焦げ臭い臭気と「火事です」という音が聞こえたため、119番通報をしました。</p>			

【事例2】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報、初期消火につながった事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし
発見者	通行人	通報者	通行人
		初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅で1人暮らしの居住者（男性・70代）が外出中、何らかの原因でコーヒーマーカーから出火し火災となりました。</p> <p>当該部屋前を通りかかった通行人2名は「火事です」という警報音が聞こえ、鳴動元の部屋の前に行き、未施錠の玄関ドアを開けると室内に煙が充満し奥で炎が立ち上がっているのが見えたため、自身の携帯電話から119番通報をするとともに、他に集まった居住者と計4名で廊下等に設置されていた消火器で初期消火を実施しました。</p>			

(2) 消火器

【事例1】消火器による初期消火により火災の延焼を防いだ事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	負傷者なし
発見者	居住者	通報者	居住者
		初期消火	あり
<p>この火災は、住宅の居住者の男児が、ライターを使用し火遊びをしており、シーツに火をつ火災となりました。</p> <p>男児からシーツが燃えていると知らせを受けた父親は、玄関内に設置していた住宅用消火器を使い初期消火を実施しました。</p>			

【事例 2】消火器による初期消火により火災の延焼を防いだ事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者が、脱衣所に置かれていた電気ストーブの電源を消したと思い、電源が入っている状態の電気ストーブに埃防止のためのタオルをかけたため、火災となりました。</p> <p>当該部屋の隣人は自宅にいたところ、プラスチックが燃えているような臭気を感じ、外を確認すると風呂場の窓から黒煙が噴出しているのを発見しました。当該部屋の玄関をノックしたところ、居住者から「火災が発生した」と聞いたので、家族に住宅用消火器を持ってくるよう指示し、初期消火を実施しました。</p>					

資料編

1 区市町村別住宅火災状況

区名	世帯数	建物から出火した火災件数	住宅火災件数	住宅火災の割合
千代田区	37,773	102	10	9.8%
中央区	96,535	86	22	25.6%
港区	145,951	158	41	25.9%
新宿区	216,903	128	56	43.8%
文京区	123,199	71	35	49.3%
台東区	124,181	64	29	45.3%
墨田区	157,015	69	39	56.5%
江東区	276,477	110	49	44.5%
品川区	226,858	89	57	64.0%
目黒区	156,910	60	41	68.3%
大田区	398,254	126	76	60.3%
世田谷区	489,372	121	96	79.3%
渋谷区	139,386	112	30	26.8%
中野区	206,061	85	64	75.3%
杉並区	323,702	81	65	80.2%
豊島区	176,253	71	38	53.5%
北区	198,967	57	41	71.9%
荒川区	117,089	40	30	75.0%
板橋区	316,494	101	67	66.3%
練馬区	381,830	103	72	69.9%
足立区	359,923	105	63	60.0%
葛飾区	239,622	88	57	64.8%
江戸川区	345,803	103	77	74.8%
特別区合計	5,254,558	2,130	1,155	54.2%

市町村名	世帯数	建物から出火した火災件数	住宅火災件数	住宅火災の割合
八王子市	276,046	103	64	62.1%
立川市	94,682	50	27	54.0%
武蔵野市	78,187	47	21	44.7%
三鷹市	96,169	22	18	81.8%
青梅市	64,324	24	14	58.3%
府中市	127,939	33	22	66.7%
昭島市	55,690	8	4	50.0%
調布市	121,783	43	26	60.5%
町田市	202,985	93	50	53.8%
小金井市	62,328	22	19	86.4%
小平市	94,183	26	19	73.1%
日野市	91,736	31	19	61.3%
東村山市	74,846	32	23	71.9%
国分寺市	62,992	17	11	64.7%
国立市	38,957	10	7	70.0%
西東京市	100,394	31	25	80.6%
福生市	30,086	14	9	64.3%
狛江市	43,134	12	11	91.7%
東大和市	40,049	16	12	75.0%
清瀬市	36,502	10	9	90.0%
東久留米市	55,777	24	10	41.7%
武蔵村山市	32,373	11	4	36.4%
多摩市	73,460	14	13	92.9%
羽村市	26,016	8	5	62.5%
あきる野市	36,080	12	9	75.0%
瑞穂町	14,971	5	2	40.0%
日の出町	7,422	4	3	75.0%
檜原村	1,165	1	-	0.0%
奥多摩町	2,643	1	-	0.0%
多摩地区合計	2,043,445	720	451	62.6%
合計	7,298,003	2,778	1,606	57.8%

※ 世帯数は令和4年1月1日現在のもの
「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」
(東京都の統計ホームページ)による

2 区市町村別住宅火災による死者発生火災件数状況

区名	死者発生件数	住宅火災件数	死者発生率※ (令和4年)	死者発生率※ (過去5年)
千代田区	1	10	10.0%	0.0%
中央区	-	22	-	1.0%
港区	-	41	-	1.4%
新宿区	-	56	-	2.3%
文京区	-	35	-	2.2%
台東区	-	29	-	6.2%
墨田区	1	39	2.6%	4.3%
江東区	2	49	4.1%	5.4%
品川区	4	57	7.0%	4.2%
目黒区	2	41	4.9%	3.8%
大田区	4	76	5.3%	3.7%
世田谷区	3	96	3.1%	4.8%
渋谷区	1	30	3.3%	3.1%
中野区	1	64	1.6%	2.9%
杉並区	-	65	-	5.4%
豊島区	2	38	5.3%	3.1%
北区	1	41	2.4%	4.4%
荒川区	1	30	3.3%	7.7%
板橋区	1	67	1.5%	3.3%
練馬区	3	72	4.2%	4.2%
足立区	4	63	6.3%	5.7%
葛飾区	5	57	8.8%	5.5%
江戸川区	2	77	2.6%	2.4%
特別区合計	38	1,155	3.3%	4.0%

※ 死者発生率 = $\frac{\text{死者が発生した住宅火災件数}}{\text{住宅火災件数}}$

市町村名	死者発生件数	住宅火災件数	死者発生率※ (令和4年)	死者発生率※ (過去5年)
八王子市	1	64	1.6%	4.7%
立川市	2	27	7.4%	4.4%
武蔵野市	1	21	4.8%	10.9%
三鷹市	3	18	16.7%	5.8%
青梅市	1	14	7.1%	3.3%
府中市	2	22	9.1%	7.2%
昭島市	-	4	0.0%	5.6%
調布市	-	26	0.0%	4.8%
町田市	4	50	8.0%	1.9%
小金井市	-	19	0.0%	5.8%
小平市	-	19	0.0%	3.3%
日野市	1	19	5.3%	3.1%
東村山市	1	23	4.3%	6.0%
国分寺市	-	11	0.0%	4.8%
国立市	-	7	0.0%	0.0%
西東京市	1	25	4.0%	1.0%
福生市	-	9	0.0%	0.0%
狛江市	1	11	9.1%	2.5%
東大和市	1	12	8.3%	2.4%
清瀬市	-	9	0.0%	9.1%
東久留米市	-	10	0.0%	2.1%
武蔵村山市	-	4	0.0%	11.4%
多摩市	3	13	23.1%	0.0%
羽村市	1	5	20.0%	3.3%
あきる野市	-	6	0.0%	3.6%
瑞穂町	-	2	0.0%	0.0%
日の出町	-	1	0.0%	9.1%
檜原村	-	-	-	0.0%
奥多摩町	-	-	-	50.0%
多摩地区合計	23	451	5.1%	4.3%
合計	61	1,606	3.8%	4.1%

3 区市町村別放火火災状況

区名	放火火災数 件	総火災数 件	放火火災 割合
千代田区	4	124	3.2%
中央区	9	107	8.4%
港区	12	199	6.0%
新宿区	26	181	14.4%
文京区	14	95	14.7%
台東区	21	118	17.8%
墨田区	17	95	17.9%
江東区	17	155	11.0%
品川区	4	108	3.7%
目黒区	6	75	8.0%
大田区	30	173	17.3%
世田谷区	20	172	11.6%
渋谷区	11	141	7.8%
中野区	5	106	4.7%
杉並区	16	113	14.2%
豊島区	16	105	15.2%
北区	9	80	11.3%
荒川区	6	53	11.3%
板橋区	19	136	14.0%
練馬区	26	140	18.6%
足立区	30	138	21.7%
葛飾区	28	122	23.0%
江戸川区	40	160	25.0%
特別区合計	386	2896	13.3%

市町村名	放火火災数 件	総火災数 件	放火火災 割合
八王子市	34	166	20.5%
立川市	10	63	15.9%
武蔵野市	1	54	1.9%
三鷹市	3	27	11.1%
青梅市	6	41	14.6%
府中市	8	50	16.0%
昭島市	-	12	0.0%
調布市	11	59	18.6%
町田市	29	130	22.3%
小金井市	2	30	6.7%
小平市	8	40	20.0%
日野市	8	43	18.6%
東村山市	10	41	24.4%
国分寺市	-	24	0.0%
国立市	9	18	50.0%
西東京市	6	33	18.2%
福生市	5	20	25.0%
狛江市	3	17	17.6%
東大和市	10	23	43.5%
清瀬市	3	16	18.8%
東久留米市	9	41	22.0%
武蔵村山市	6	18	33.3%
多摩市	9	29	31.0%
羽村市	3	12	25.0%
あきる野市	16	32	50.0%
瑞穂町	4	12	33.3%
日の出町	2	3	66.7%
檜原村	-	1	0.0%
奥多摩町	-	1	0.0%
多摩地区合計	215	1,056	20.4%
合計	601	3,952	15.2%

※ 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上します。

4 広報資料(STOP! 住宅防火シリーズ)

(1) STOP! 着衣着火

※ 掲載しているデータは2つ折りのリーフレットデータです。

着衣着火を防ぐポイント

- 調理中は、マフラー・ストールなどは外し、すそや袖が広がっている服を着ている時は、特に炎に接しないように注意する。
- こんろのまわりに物を置かない。こんろのまわりの物を取る時に、着衣に燃え移る事例が多数発生しているので注意する。
- 鍋等の底から炎がはみ出さないよう、適切な火力に調節する。
- カセットこんろ等は取り扱い説明書をよく読んで正しく使用する。



防災品を使用しましょう

- 防災品とは、火がついても容易に着火せず、着火しても延焼拡大を停止する自己消火性を備えた素材で作られた品物のことをいいます。

防災品ラベルは2種類あります



提供：日本防災協会

※ラベルには様々な様式があります。

左：防災品 右：非防災品



- 着衣着火を防ぐため、こんろなどの火気を使用する際はエプロンやアームカバーなどは防災品を身につけましょう。

同じタイミングで着火しても、防災品のエプロンは燃え広がらず、受傷リスクを大幅に軽減することができる。

もしも着衣に着火した時は

水をかける、脱ぐ、たたくなどして早急に消火し、119番通報を行いましょう！！



問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和5年10月発行

STOP!

STOP! 住宅防火シリーズ① 火災から大切な命を守ろう

着衣着火とは

着衣着火とは、調理中にこんろの火が袖口に燃え移るなど、何らかの火が身に付けている衣服に着火したことをいいます。

着衣着火の発生状況

- 令和4年の死傷者が発生した着衣着火による住宅火災件数は43件で、前年と比較すると3件増加しています。
- 令和4年の着衣着火による死者数は2人で、前年と比較すると1人増加しています。

年	死者	傷者
H30	1人	15人
R1	2人	27人
R2	1人	21人
R3	1人	23人
R4	2人	27人

約8割が「こんろ」が着火原因です!

原因	件数	割合
こんろ	175件	81.0%
その他	41件	19.0%
ローソク	19件	8.8%
ストーブ	6件	3.7%
ライター	4件	1.9%
その他	10件	4.6%

n=216

死者が発生した着衣着火件数・死者数・傷者数 (平成30年～令和4年 住宅内 自損は除く)

出火原因別の死傷者が発生した着衣着火件数 (平成30年～令和4年 住宅内 自損は除く)

東京消防庁

死傷者が発生した着衣着火のうち「こんろ」を出火原因とする火災は約8割を占めています

過去5年間の住宅火災で、こんろを出火原因とする着衣着火の主な事例をご紹介します(平成30~令和4住宅内181人中、死者9人、傷者172人)

顔・頸部(8人)

90歳代女性は、自宅の台所で調理をしていた際に、エプロンの袖がこんろの火に接触して、着火し、受傷した(中等症)。

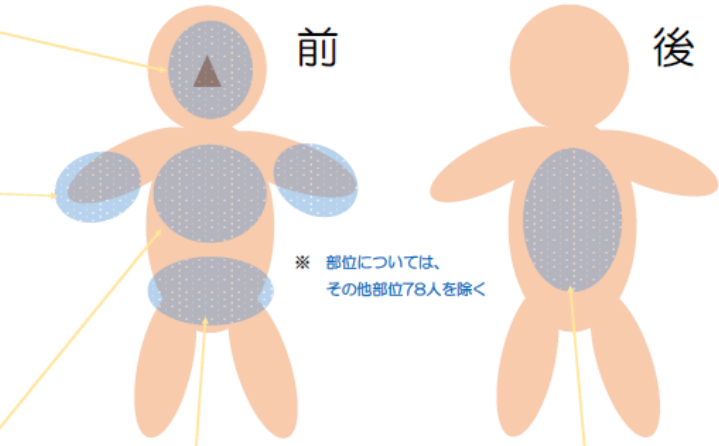
手・腕(55人)

①20歳代女性はコンロで調理中に着衣に火が燃え移り、同居人20歳代男性に初期消火を依頼した。男性も初期消火中に受傷した。(男女ともに中等症)

②20歳代女性は、調理中ガステーブルの奥に置いてある調味料を取ろうとした際に、着ていた割烹着の袖がこんろの炎に触れて着火し、右手の甲を受傷した(軽症)。

胸部(9人)

60歳代女性は、調理中の鍋からはみ出したこんろの火が着衣のすそに着火し、上半身にかけて燃え広がり受傷した(重症)。

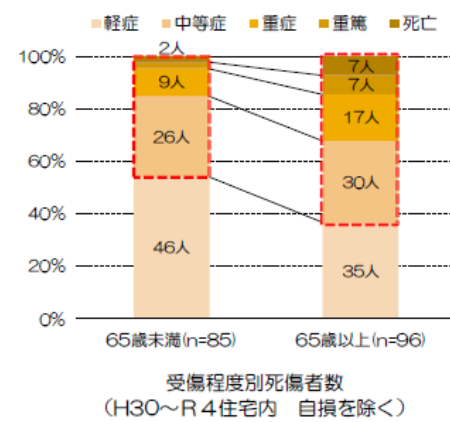
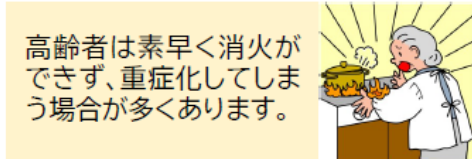


腹部(9人)

30歳代女性は、哺乳瓶を煮沸消毒中、こんろ上部のフックに調理器具をかけようとした際に、着衣に着火し、受傷した(軽症)。

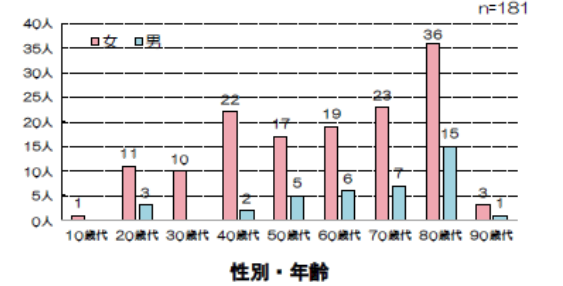
背部(22人)

70歳代女性は、調理のためこんろに火をつけ、後ろを向いたところ着衣に着火し受傷した(中等症)。



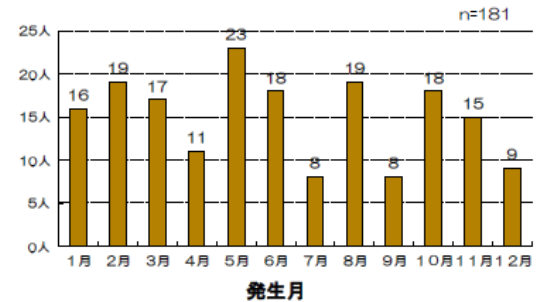
女性に多い

こんろによる着衣着火の死傷者は、女性が男性の3倍以上です。年齢では、80歳代が最も多く、90代を除き年齢が上がるごとに多くなる傾向にあります。



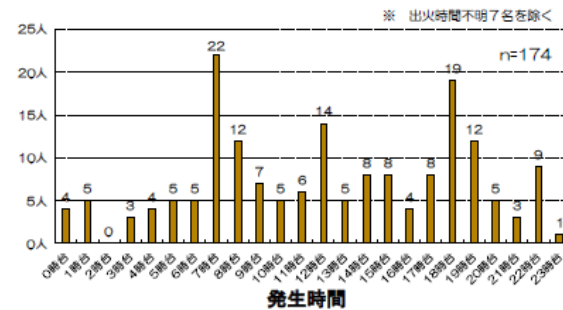
生活・服装の変化

こんろによる着衣着火の死傷者は、季節に関係なく発生しています。



調理する時間帯に注意

こんろによる着衣着火の死傷者は、調理する時間帯と考えられる7時台及び12時台、18時台で多く発生しています。



(2) STOP! たばこ火災

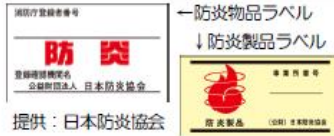
たばこ火災から大切な命を守るために

■ 防災品を使いましょう。

防災品は、火が接しても容易に着火せず、着火しても延焼拡大を停止する自己消火性を備えた品物のことを言います。

じゅうたん、布団、シーツ等の身の回りの布製品は防災品を使いましょう！

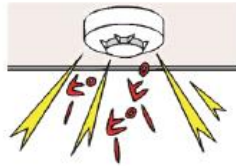
防災品ラベルは2種類あります



※ラベルには様々な様式があります。

■ 住宅用火災警報器を設置しましょう。

設置場所は、全ての居室・台所・階段です。火災の煙や熱を感知した警報音に気づき、早い通報や消火により被害を最小限に抑えた事例が多くあります。



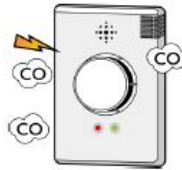
CO機能付き住警器でより安心！

■ たばこの火種の無煙燃焼

たばこによるごく小さな火種は、布団等に落ちるとすぐに燃え広がらずしばらく無炎燃焼(炎を出さずに燃え広がる)を続け、一酸化炭素(CO)を放出し、燃え広がる前に出火室内や他の部屋にも充満する場合があります。

■ 無色・無臭の一酸化炭素(CO)

一酸化炭素(CO)は無色・無臭で毒性が強い気体です。無煙燃焼が継続して濃度が高まると、一酸化炭素中毒により死に至る危険性があります。



燃焼で発生する一酸化炭素(CO)から、いち早く火災を感知するため、

CO機能付き住宅用火災警報器を設置するとより安心です。

問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和5年10月発行



STOP!

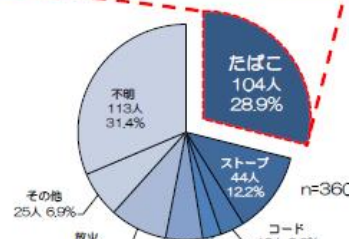
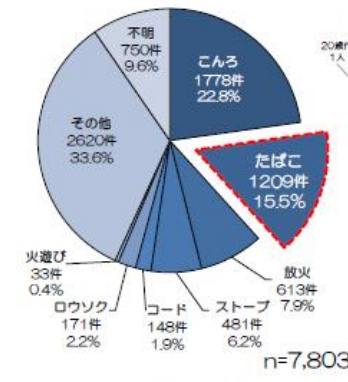
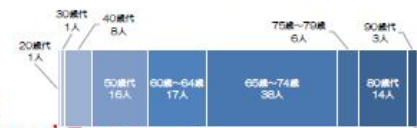
STOP! 住宅防火シリーズ② 火災から大切な命を守ろう

たばこ火災の発生状況

- 住宅火災のうち「たばこ」を出火原因とした住宅火災では、最も多くの死者が発生しています。
- 「たばこ」を出火原因とした住宅火災の死者は、半数以上が65歳以上の高齢者で発生しています。
- 出火原因「たばこ」による住宅火災は、「こんろ」に次いで2番目に多く発生しています。

たばこ火災

「たばこ」を出火原因とした年齢別死者数 (H30~R4 住宅火災)



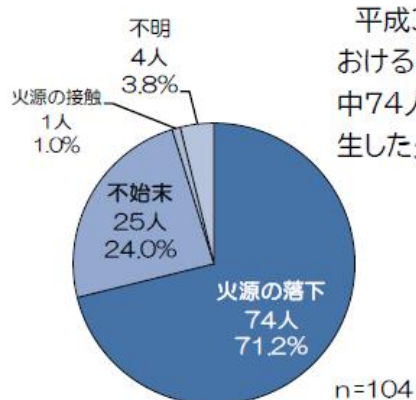
出火原因別火災件数 (平成30年~令和4年 住宅火災)

出火原因別死者数 (平成30年~令和4年 住宅火災)



東京消防庁

たばこ火災発生原因



たばこ火災発生状況別死者数
(平成30年～令和4年 住宅火災)

平成30年から令和4年までの過去5年間に
おける「たばこ」による住宅火災の死者104人
中74人が「たばこの火種が落下する」ことで発
生した火災で亡くなっています。



あなたにも起こりうるたばこ火災

事例①:死者が発生した「たばこ」による住宅火災

共同住宅の居住者(女性・40歳代)がたばこの火種を灰皿の上で消した後、ごみ箱に捨てたことにより残っていた火種が中のごみくずに着火し火災となったもの。



事例②:死者が発生した「たばこ」による住宅火災

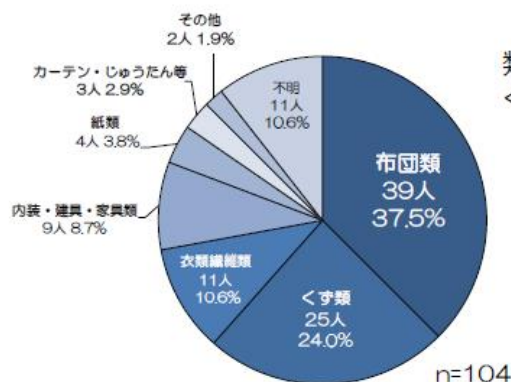
長屋兼共同住宅の居住者(男性・70歳代)が、在宅酸素吸入器を使用中、寝たばこをし、火源が鼻カニューレに落下したことにより穴が空き、送気されていた高濃度酸素により火種が拡大し火災となったもの。



在宅酸素療法を行っている方は要注意！

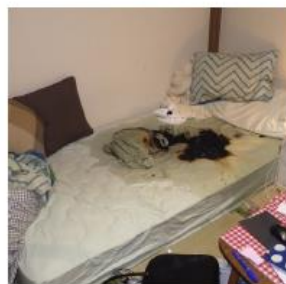
たばこの火源が鼻カニューレに着火する検証実験の状況

たばこ火災の着火物は何か？



たばこ火災の着火物別死者数
(平成30年～令和4年 住宅火災)

着火物別の死者数では、布団類、くず類、衣類繊維類の順で多くなっています。



寝たばこにより火源が落下し
布団に着火した火災

たばこ火災を防ぐポイント

- 寝たばこは絶対にしない。
- 吸殻を灰皿やごみ箱にためないようにする。
- 吸殻を捨てる時は、必ず水をかけ完全に消火する。
- 火種を落とさないよう安全な場所で喫煙する。
- 禁煙、加熱式たばこへの切替も考える。



就寝前や外出前は必ず消す！

吸殻の捨て方に注意しましょう！



万が一の火災で、延焼拡大防止するポイントは裏面をチェック！

(3) STOP! ストープ火災

ストーブ火災を防ぐポイント

- 外出時や就寝時は必ず消す。
- 周囲に布団やカーテン、洗濯物などの燃えやすいものを置かない。
- スプレー缶は近づけない。
- 給油は必ず消してから行う。



ストーブ火災に備えて

住宅用火災警報器を全ての居室・台所・階段に設置しましょう

住宅用火災警報器の設置により火災の拡大を防いだ事例

バスマットを電気ストーブにかけていたところ、何らかの原因でストーブのスイッチが入り、火災となりました。住宅用火災警報器の鳴動により火災に気づき、119番通報と消火器による初期消火を実施し、火災の拡大を防ぎました。



カーテンやじゅうたん、寝具類など住宅内の布製品は防炎品にしましょう

防炎品の使用により延焼拡大を防げたかもしれない事例

ダイニングテーブルの下で使用していた電気ストーブの電源をつけたまま外出し、付近に置いていた木製椅子の脚及び座布団等の可燃物が電気ストーブに接触して出火しました。



防炎品ラベルは2種類あります



※ ラベルには様々な様式があります。

問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和5年10月発行



STOP!

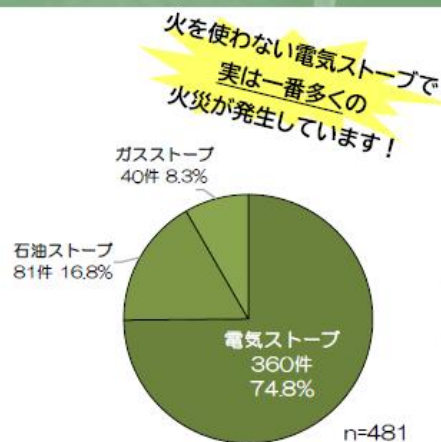
STOP! 住宅防火シリーズ③ 火災から大切な命を守ろう

あらゆる器具で発生するストーブ火災

- 過去5年間で東京消防庁管内においてストーブを出火原因とする火災が481件発生しました。
- 電気ストーブによる火災が74.8%で、非常に高い割合となっています。



電気ストーブに布団が接触し焼損した状況



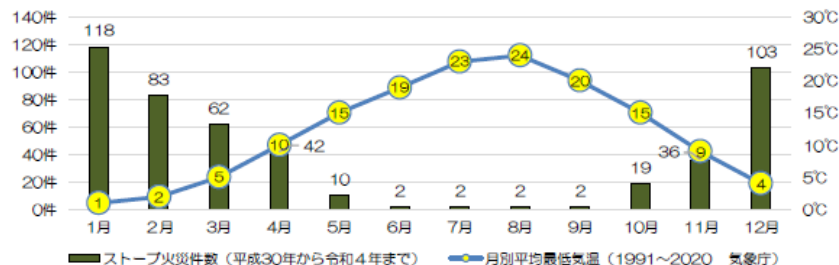
出火原因ストーブの内訳
(平成30年～令和4年 住宅火災)

ストーブ火災

東京消防庁

寒い時期を中心に発生！

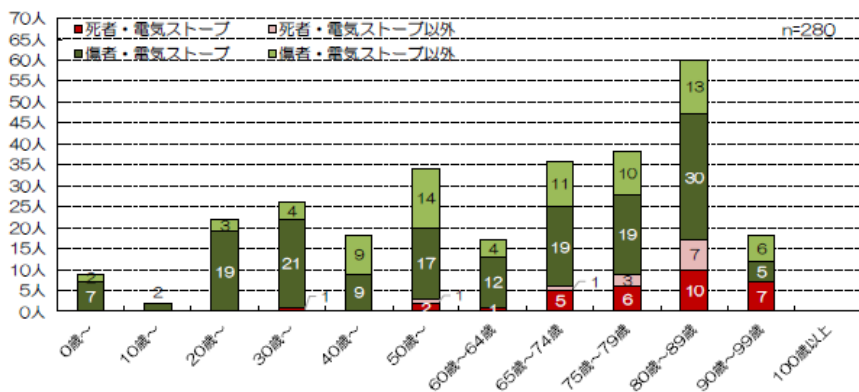
- ストープ火災は、平均最低気温15度となる10月の秋頃から増え始め、4月の春先にかけての時期を中心に発生しており、注意が必要です。



月別のストーブ火災件数 (平成30年~令和4年 住宅火災)

死傷者の発生状況(過去5年)

- ストープ火災による死傷者は計280人(死者44人、傷者236人)で、このうち7割の192人は電気ストーブが出火原因となっています。
- ストープ火災による死者は44人で、このうち32人は電気ストーブが出火原因となっています。また、死者44名のうち39名が65歳以上の高齢者です。

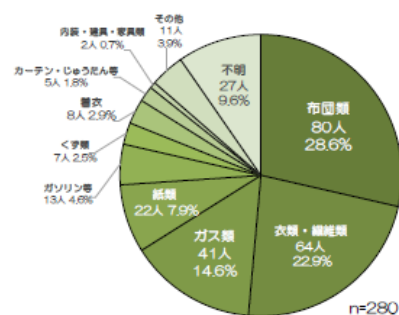


年齢別のストーブ火災による死傷者数 (平成30年~令和4年 住宅火災)

ストーブの周りに物を置かない

- 死傷者280人のうち、布団類や衣類・繊維類の可燃物に着火した件数は144件で、51.5%となっています。

- ガス類(スプレー缶等)が2番目に多くなっています。



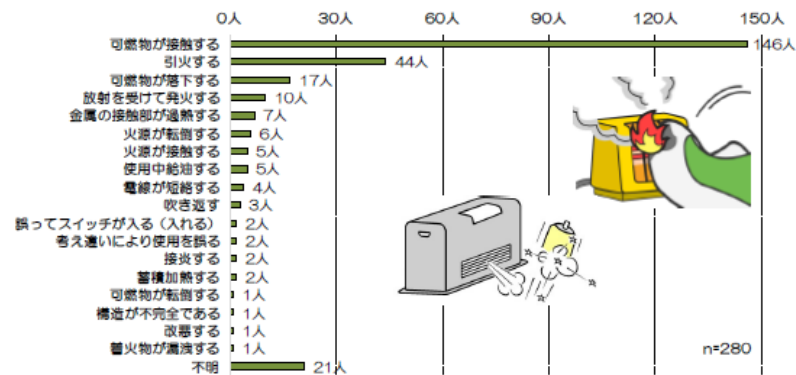
室内でストーブが原因となりスプレー缶内のガスに引火し爆発した火災 (屋外ベランダの様子)

着火物別のストーブ火災 (平成30年~令和4年 住宅火災)

スプレー缶廃棄時の火災も発生しています！

- 可燃物とストーブが接触することや、ストーブ付近のスプレー缶等が高温になって破裂し、漏れたガス類へ引火し爆発することによって、火災が発生しています。

スプレー缶を捨てる時は穴をあけたりせず、必ず最後まで使い切ってから自治体の廃棄方法に従って捨てましょう。



出火経路別のストーブ火災件数 (平成30年~令和4年 住宅火災)

(4) STOP! こんろ火災

こんろ火災を防ぐポイント

- 調理中にこんろから離れない。
- こんろの周りに燃えやすいものを置かない。
- 換気扇や魚グリル等は定期的に掃除する。
- こんろの上や奥にあるものを取るときは、火を消す。
- 防災品のエプロンやアームカバーを使用する。
- 火が鍋底からはみ出さないように調節する。
- 安全機能付きのこんろ*を使用する。



防災品ラベルは2種類あります



※ ラベルには様々な様式があります。

※ 現在製造されている家庭用ガスこんろは全て全口に調理油過熱防止装置、立ち消え安全装置、こんろ・グリル消し忘れ消火機能を有する Siセンサーこんろです。

カセットこんろは適切に使いましょう

カセットこんろによる住宅火災では、鍋などからはみ出した炎が着衣に着火したり、不適切な使用でボンベが爆発したりし、死者や負傷者が発生しています。次のことに注意して安全に使いましょう。

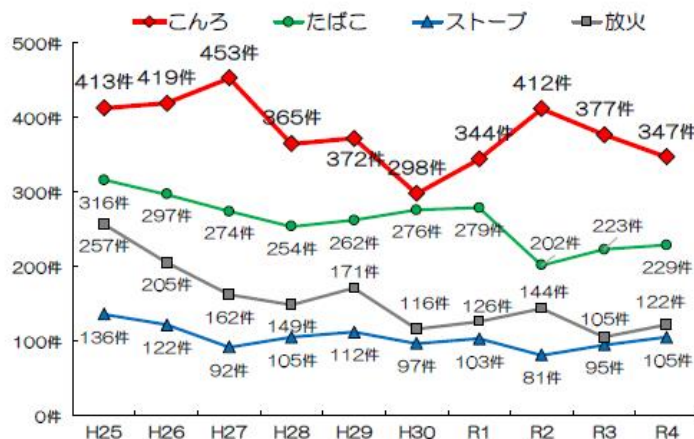
- カセットボンベを暖房器具の前や高温になる場所に置かない。
- カセットこんろ全体をおおうような大きな調理器具は使用しない。
- ★ ボンベが高温になり爆発の原因に！
- IHクッキングヒーターやガスこんろの上にカセットこんろを置かない。
- ★ 誤って下のこんろのスイッチを入れて爆発する事故が発生！



問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和5年10月発行

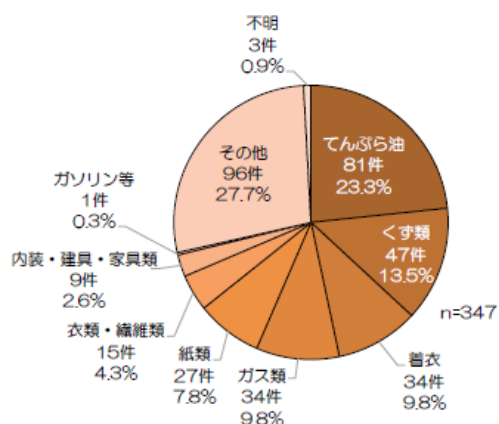


出火原因別の住宅火災件数の推移（平成25年～令和4年）

東京消防庁

調理中に離れない

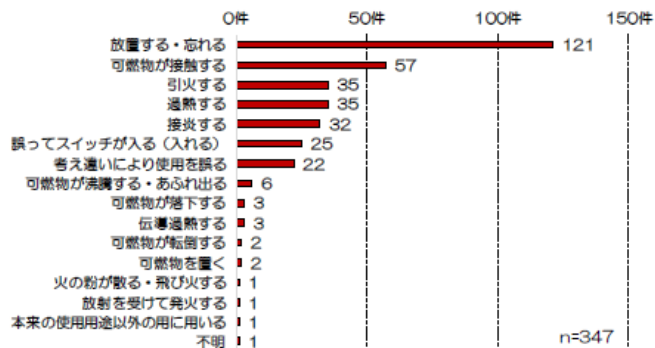
- 令和4年中、こんろ火災は347件発生し、「てんぷら油」に着火して火災に至った件数が最も多くなっています。
- 油かすやごみくずの「くず類」、エアゾール缶などのガス類、身に付けている衣服に着火した「着衣」の件数も多くなっています。



※「天ぷら油」とは、調理に使用する動植物油をいいます。
 着火物別のこんろ火災件数
 (令和4年 住宅火災)

- 火をつけたまま放置し忘れること、そしてくず類などの可燃物がこんろの火と接触することで火災が発生していることがわかります。

★調理中に**こんろから離れず**、離れる場合には**こんろの火を必ず消す**ことが火災を発生させないポイントです。



出火経過別のこんろ火災件数 (令和4年 住宅火災)

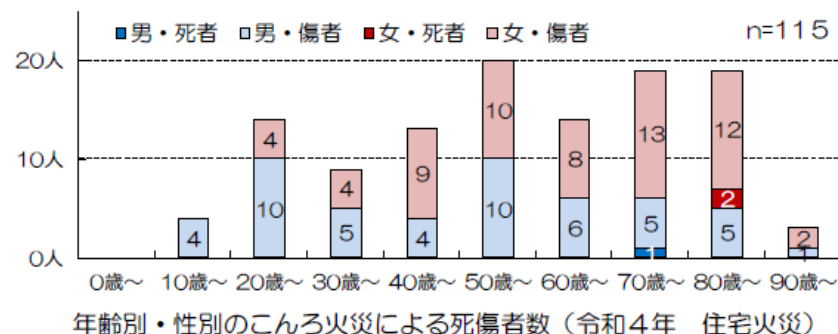
使用の誤りによる火災事例



電気ケトルをこんろに乗せ、点火したことにより火災となった。

死傷者の発生状況

- 死者3人のうち、男性は1人、女性は2人で、全て65歳以上の高齢者となっています。
- 傷者は112人で、男性が50人であるのに対して、女性が62人と、女性の傷者が多くなっています。



住宅用火災警報器の設置で被害軽減

全ての居室・台所・階段に住宅用火災警報器の設置が必要です

奏功事例

共同住宅の居住者(男性・40歳代)が、鍋を火にかけたまま就寝し、鍋が過熱され続け空焚き状態になり、発生した煙を住宅用火災警報器が感知した。隣に住んでいる住人が、住宅用火災警報器の鳴動音とベランダから煙が出ているのを見つけ、自身の携帯電話で119番通報し、火災を未然に防いだ。



備えましょう 消火器

～火を使う場所に備えましょう～

消火器による初期消火は、火災の被害軽減や抑制に効果的です。一般住宅向けの小型で軽量の住宅用消火器や、片手でも使用できるエアゾール式消火器具もあります。



使用放置による火災事例

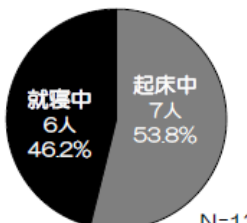


調理中の鍋が空焚きになったことで火災となった。火が上がっていても消火器があれば延焼拡大を防ぐことができる。

(5) STOP！電気火災

住宅用火災警報器で早期発見

- 電気コード火災等によって亡くなった方は、約5割が就寝中に発生した火災により命を落としています。
- 住宅用火災警報器は火災の煙や熱を感知し、警報音を発します。
- 住宅用火災警報器を全ての居室・台所・階段に設置することで、火災が小さいうちに発見し、自分の命を守ることができます。



電気コード火災等発生時の死者の行為状況 (平成30年～令和4年住宅火災) ※行為状況不明16人を除く

設置してよかった住宅用火災警報器

共同住宅の居住者(男性・30歳代)の居室で、長年電気コードが極端に折れ曲がった状態で使用されていたため、内部の線が半断線していました。半断線により電線に過度の電流が流れたため、発熱し、短絡して火災となりました。

隣人が、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき119番通報するとともに、消火器で初期消火を行ったため、火災の延焼を防ぎました。

適切な維持管理を



住宅用火災警報器がホコリなどで汚れている場合、火災を感知しにくくなります。定期的に乾いた布で拭き取りましょう。

また、設置後10年を経過したものは電子部品の劣化等により火災を感知しなくなるおそれがありますので、**機器本体を交換**しましょう。

※一般的に点検の際の音声等は自動で停止します。

点検も忘れずに！



問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

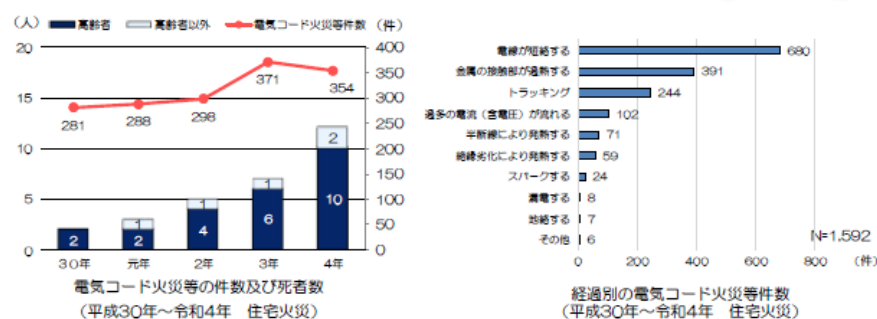
令和5年10月発行

STOP!
STOP! 住宅防火シリーズ⑤ 火災から大切な命を守ろう
電気火災

身近に潜む電気火災危険

電気火災とは、電気や電気製品にかかわる火災のことをいいます。

- 電気火災の中でも電線の短絡・トラッキング・半断線等によって起こる火災(以下「電気コード火災等」という。)は、火を使用している意識がないため、火災に気づきにくい特徴があります。
- 電気コード火災等は増加傾向にあります。電気コード火災等による死者数は年々増加しています。
- 電気コード火災に至る経過として、電線の短絡、金属の接触部過熱、トラッキングの順で発生しています。



東京消防庁

電線の短絡(ショート)・半断線

電気コードの家具等による踏みつけ、束ねての使用、折れ曲がったままの使用は、電気コードの被覆の損傷や温度上昇、経年劣化による短絡(ショート)、半断線による発熱を引き起こし、火災の原因になります。

- 電気コードを家具の下敷きにしない。
- 束ねて使用しない。
- 折れ曲がりに注意する。



※ 半断線とは、コード内部の線が一部断線した状態のことをいいます。

- すでに被覆がはがれているコードは使用しない。

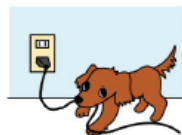
死者が発生した火災事例

半断線により出火した火災

この火災は、何らかの荷重がかかったことによりテーブルタップのコードが半断線状態になり発熱し、周囲にあった衣類に着火して火災となりました。この火災により、居住者2名(女性・40歳代、女性・70歳代)が亡くなりました。

小動物が原因となった火災

冷蔵庫のコードをねずみ等の小動物がかじったことにより配線が短絡し、火災となりました。この火災により、居住者(男性・60歳代)が亡くなりました。



普段利用している電気製品から
気づかぬうちに火出しています！

金属の接触部の過熱

プラグがコンセントにしっかり差し込まれていなかったり、プラグの差し刃が変形していたりすると、過熱して火災の原因になります。

- プラグはコンセントにしっかり差し込む。
- プラグ・コンセントは変形等がないか定期的に点検する。



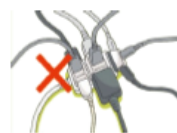
トラッキング

コンセントに差したプラグの差し刃の周りにほこりが付着していると、湿気を帯びたほこりが電気回路を形成し放電を繰り返すことで火花が発生し、火災となります。

- コンセント周りは定期的に点検・清掃する。
- 使用しないプラグは抜いておく。
- 家具や大型家電製品の裏など、見えにくい場所のコンセントには特に注意する。



過多の電流



電源タップを決められた容量以上で使用すると発熱し火災の原因になります。

- 電源タップは決められた容量内で使用する。